

修士論文

大学生における友人関係の理想と現実の  
差異に関する研究

岩手大学大学院教育学研究科  
修士課程学校教育専攻（心理学）

和賀 千裕

2010年3月

## 目 次

はじめに .....	3
第 I 部 文献研究 .....	4
第 1 章 友人関係について .....	5
第 1 節 青年期の友人関係について .....	5
第 2 節 現代青年の友人関係に関する諸説 .....	6
第 3 節 友人関係の理想と現実の差異について .....	8
第 2 章 Internal Working Model ( IWM ) .....	10
第 1 節 Internal Working Model ( IWM ) とアタッチメン ト理論 .....	10
第 2 節 青年期の対人関係における「IWM」に関する研究 .....	13
第 3 章 自己意識と自己意識特性 .....	15
第 1 節 自己意識 .....	15
第 2 節 自己意識特性 .....	16
第 3 節 自己意識特性に関する諸研究 .....	17
第 4 章 信頼感に関する研究 .....	20
第 1 節 概説 .....	20
第 2 節 Erikson が提唱した基本的信頼感 .....	21
第 3 節 信頼感に関する諸研究 .....	23
第 II 部 実証的研究 .....	25
第 5 章 友人関係の理想と現実の差異の大きさに関する検討 【研究 1】 .....	26
第 1 節 目的 .....	26
第 2 節 方法 .....	26
第 3 節 結果 .....	29
第 4 節 考察 .....	38
第 6 章 友人関係の理想と現実の差異の個人差に関する検討 【研究 2】 .....	40
第 1 節 目的 .....	40
第 2 節 方法 .....	40
第 3 節 結果 .....	43
第 4 節 考察 .....	55
第 III 部 全体的考察 .....	57
第 7 章 本研究の結論 .....	58

第 8 章 今後の課題 .....	60
第 IV 部 参考文献・引用文献 .....	61
謝辞 .....	70
Appendix .....	72

## はじめに

日常生活の大半を友人と過ごし、学校生活を楽しく送るための要因として友人関係が非常に重要視されやすい(古市・玉木, 1994)青年期は、理想の友人との付き合い方や現実の友人との付き合い方を意識しやすい時期である。学校生活において教室に居づらく保健室登校をしている生徒の理由としては友人関係の問題が 73.5%と非常に大きな位置を占めている(神保・須々木・中島・吉川, 1996)。また、高井(2008)が、青年期の人間関係の悩みを自由回答で調査しているが、恋愛関係と同じくらい友人関係で悩んでいるものが多く、特に女子では友人関係の悩みを抱えているものが一番割合的に多くなっていた。このように、友人との良好な関係を築くことは青年期の重要なテーマといえる。

友人関係において多くの者は出来ることならば、相手と何でも分かり合いたい、相手に自分の思ったことを言いたい、と望むだろう。落合・佐藤(1996)は、特に女子の場合同性の友人と理解しあい、共感し共鳴し合うといった関係を望んでいると推察している。しかし、実際は自分の思い描く友人との付き合い方が出来ず、実際に自分が認識している付き合い方との差異を感じる人が多い。

友人関係においてのみならず、理想と現実の差異の大きさや、またその差異をどの程度重くとらえるのかというのには個人差がある。そこで、本研究では友人関係における理想と現実の差異を中心に研究を進めていく。

友人関係における理想と現実の差異の大きさについて、研究 1 では Internal Working Model (以下 IWM) と関連させて検討する。さらに、友人関係における理想と現実の差異の感じ方を研究 2 では、信頼感、自己意識特性、と関連させて検討する。そのために、研究 1・2 のそれぞれにおいて、IWM、基本的信頼感、自己意識特性が理想と現実の友人関係に与える影響を検討し、その後それぞれの特性が友人関係の理想と現実の差異にどれほど影響を与えているのかを検証していく。

## 第 I 部 文献研究

## 第 1 章 友人関係について

### 第 1 節 青年期の友人関係について

青年期は第二次性徴に伴い、親から心理的に離れるようになり、大人や社会への反抗が見え隠れする時期である。その中で一日の大半を友人と過ごすようになり、重要な相談や悩み事を親などの大人に話すよりも、友人に話すことの方が増える。特に、年齢が増すにつれ、遊び仲間から特定の友人としてのつきあいに変化していく過程では、お互いにぶつかりあい、傷つくこともある。青年期の友人関係において、青年自身の成長につれて、自分で考え、お互いに満足できるように友人とのつきあい方が変わっていくことが必要になる。Damon (1983) は、青年期の友人関係は、活動や物の共有を中心とした関わりをする児童期とは異なり、内的体験の共有や友人に対する忠誠や親密性を中心とした関係に変化すると述べている。特に、年齢が増すにつれて内面的なつきあいを求め、より深く友人と関わるようなつきあい方へと変化していくことが分かっている（落合・佐藤，1996；榎本，1999；榎本，2000）。友人と深く関わっていくことで、信頼関係を築き、自分を見つめ直す機会を持つこととなるが、一方で友人との関係の悪化やトラブルが生じることも多い。

学校生活における満足感に関しても、友人関係が上手くいっているかいないかが非常に大きな位置を占めている。高校生に関する調査において、親しい友人と一緒にいる時が学校で最も充実していると感じる時であるとおよそ八割の人が挙げている（財団法人日本青少年研究所，2004）。加えて、学校へ行きたくない理由について、『友人関係』を挙げる人が多く、友人関係の悪化により不登校の問題にも発展するほど（文部科学省，2008），学校生活を有意義に過ごせるかについて友人関係が重要であることがわかる。一日の大半を学校で過ごし、同年代の青年と関わることが多い青年期は、親などの大人との関係よりも友人との親密な関係を築けるのかが、非常に心を砕く問題として挙げられるのである。

また、青年期は自分自身に対する関心が高まり、他者との関係を通して自己概念を獲得し、アイデンティティが確立されて

いく時期である。そのような時期において、友人は重要な他者として位置づけられる。青年は友人と親密な関係を築いていく中で、自分を相対化し、自己を深めていく(加藤・高木, 1997)。

Erikson(1964)は発達段階ごとの課題を挙げているが、その理論における青年期の課題は、「アイデンティティ」対「アイデンティティの拡散」としている。これらの危機を乗り越えていくことで、健全な人格形成に繋がるとしている。しかし、青年期のみならずアイデンティティはその人の人生全般に関わる課題と捉えている。アイデンティティの確立には友人に対する信頼感や友人との関係に対する安定感が重要であるとされており(宮下, 1998)、特に女子については青年期の課題であるアイデンティティの確立にとって友人関係が重要であるといえる。しかし一方で、現代青年の特徴である「傷つきたくない」「嫌われたくない」という思いから、自分の思ったことや感じたことを出せないことが、自己のアイデンティティ感覚を確たるものにすることにネガティブな影響を与えているという指摘もある(大崎, 2003)。

現代青年の友人関係に関する特徴については次節で述べることとする。

## 第2節 現代青年の友人関係に関する諸説

現代青年の友人関係は、対人関係の“希薄化”によって変化したという指摘がある。“希薄化”とは、相手と深く関わることを避け表面的な付き合い方をするような付き合い方である。“希薄化”の特徴として深いところで関わることを避け、表面的な楽しさを求めて群れる傾向(岡田, 1995)や、自分が傷つくことを避け友人が悩んでいる時にはそっとしておくことがやさしさであると考えられる傾向(白井, 2006)などが挙げられる。このように、相手に深く立ち入らず楽しいことを追求した友人との付き合い方が青年の間で進んでいるといわれる。

現代青年の友人関係について、岡田(1995)は群れ志向・不介入(傷つきたくない)・評価懸念・ふれあい恐怖症といった特徴を抽出している。また、青年期の友人関係におけるジレンマの研究を通して、「相手を傷つけない」「相手に寂しい思いをさせたくない」という動機よりも、「自分が傷つきたくない」「自

分が寂しい思いをしたくない」という思いの方が強いことが明らかにされている（藤井，2001）。

それでは，現代青年自身は自分の付き合い方をどう考えているのかというと，青年自身はそうした関わりを理想としているわけではなく，特に理想として内面的な関係を求めていることが示されている（岡田，1999）。財団法人日本青少年研究所の友人関係に関する調査によると，「お互いの心を打ち明けあう」という付き合い方をする高校生は80%近くであった。この結果から，現代青年自身は友人と内面を見せ合って付き合っていると考えている人が多いことが分かる。これに対して，現代青年が友人関係の「希薄化」をどうとらえているかに関する研究があるが，自分の本心が言えない時や相手が本心を話してくれない場合は，「希薄化」したと考え，自己開示の交換が親密さの確認にとっては必要であると認識している（白井，2006）。この研究と合わせて考えると，現代青年自身が自分の友人との付き合い方が“希薄化”しているとはあまり捉えていないことが分かる。榎本（1999）は，中学・高校・大学のどの段階でも，親しい友人との間では，自分の意見をはっきりと伝え，一緒にいても自分の意見で行動し，友人を信頼して安定した関係があると示唆している。

しかし，一方で友人に対して深く関わることを避けるような付き合い方をしている傾向が見られる。友人に対して高校生の半数が「その場は楽しくやっているが，気持ちが通い合っていない」と感じるものが「よくある」「時々ある」と感じ，また，「自分を犠牲にしてでも相手に尽くす」付き合い方をしている人はわずか全体の30%近くにしかあがらなかった<sup>2)</sup>。このように，自分は自分，他人は他人と考え，相手に働きかけないことがごく普通の接し方である（松井，1990）と考えている傾向がうかがえる。



### 第3節 友人関係の理想と現実の差異について

友人関係において多くの者は出来ることならば、相手と何でも分かり合いたい、相手に自分の思ったことを言いたい、と望む。特に女子の場合同性の友人と理解しあい、共感し共鳴し合うといった関係を望んでいる（落合・佐藤，1996）と言われている。しかし、実際は自分の思い描く友人との付き合い方が出来ず、実際に自分が認識している付き合い方との差異を感じる人が多い。

友人関係のみならず、私たちは様々な場面で理想と現実の差異を感じるが、そもそもどのような時に理想と現実の差異が生じるであろうか。人は、自分自身に注意や意識が向くと自己を評価する。この自己評価の過程で理想と現実の差異を感じやすい（Duval, S. & Wicklund, R. A., 1972）。例えば、鏡で自分を見たときや、親しい友人が成功した話を聞いたときなど、自己に注意が向くような出来事が行ったときなどに、自己の現実と理想の差異を意識するようになる。そして、自己の現実と理想の不一致が大きいほど、負の自己評価が生じ、結果的に不快感情が生まれる。そのため、一般的に自己の理想と現実の差異を大きく認識した時、不満感情が大きくなるといえる。特に自分に意識の向きやすい青年期は、自己評価が頻繁に行われ、理想と現実の差異に悩まされていると考えられる。さらに、青年期は第1節でも述べたように、友人との付き合いが非常に彼らにとって重要な位置を占めている。青年期の中心的な対人関係である友人関係において、友人との適度な距離を保つという課題はいまだ模索の段階にあり（藤井，2001）、深く関わりたい、でもそれが出来ないという理想と現実の差異が生まれやすいことが予想される。

友人関係の理想と現実の差異について扱った研究としては、友人関係の理想と現実の差異を自己受容や友人関係の満足感から検討されたものがある（吉岡，2001）。その結果、友人関係の理想と現実の差異が大きい者ほど、友人関係の満足感が低くなっていた。このように、友人関係において理想と現実の差異は友人関係の満足度に影響に関係している。しかし、友人関係の理想と現実の差異が大きくても、自己受容が出来ていると友人関係の満足感が高くなるという結果も得ている（吉岡，2001）。

このことから、友人関係の理想と現実の差異の大きさだけで友人関係の満足感を語る事が出来ないことも明らかになった。そのため、理想と現実の差異が大きくとも自己受容感などの別の要素が関連することで、差異が生じても特に青年にとって大きな問題にならないということが推察される。

友人関係の理想と現実の差異の大きさだけでなく、その他の要素も含めて、青年の理想と現実の差異の感じ方について考えていかなければならない。本研究では、友人関係の理想と現実の差異に着目して研究を進めていく。

## 第 2 章 Internal Working Model ( IWM )

### 第 1 節 Internal Working Model ( IWM ) とアタッチメント理論

Internal Working Model (以下, IWM) は, 日本では「内的作業モデル」とも呼ばれ, 主に乳幼児期の母子関係を中心として, 発達段階ごとに徐々に形成されていく。IWM は, もともと認知心理学者である Craik (1943) の考えに見られると言われている (Bretherton, 1985)。Craik (1943) の考えを, Bowlby がアタッチメントの現象に適用した。Bowlby (1969, 1973) によれば, 子どもは主に養育者である母親とのやり取りを通して, 自分や他者がどの程度期待できる存在であるのかと言った心的な表象モデルを形成し, これらのモデルに支えられて, 人は種々の出来事を知覚し, 未来を予測し, 自分の行動の計画を立てるのだという。一旦構成された IWM は大きな出来事がない限り修正されることはないため, 特に生後 6 ヶ月から 5 歳くらいまでに構成された IWM が, その後の人生において重要な意味を持つ。それを支持する研究として, Hazan & Shaver (1987) の成人の愛着理論に関する研究が挙げられる。Hazan & Shaver (1987) は, 形成された IWM がその後の対人関係スタイルに影響を与えていることが明らかにしている。

IWM は養育者との相互関係の中で, 形成されていくものであるが, 養育者との間の愛着の質によって, 形成時に個人差が生まれる。そこで, Ainsworth, M. D. S., Blenar, M. C., Waters, E, and Wall, S (1978) は愛着の個人差を測定するために, “ストレンジ・シュチュエーション法 (Strange Situation Procedure: 以下, SSP)” という実験的な手法を考案した。SSP とは, 乳児を新奇な実験室に呼び, 見知らぬ人と対面させたり, 養育者 (主に母親) と分離させたりすることで, 乳児がストレスを感じた際にどのような反応を取るのかを観察しようとする実験方法のことである。SSP は 8 つの場面からなるが, その方法については以下のようにになっている。

< SSP の 8 場面 >

- ① 実験者が母子を室内に案内，母親は子どもを抱いて入室。実験者は母親に子どもを降ろす位置を指示して退室。(30 秒)
- ② 母親は椅子に座り，子どもはおもちゃで遊んでいる。(3 分)
- ③ ストレンジャーが入室。母親とストレンジャーはそれぞれの椅子に座る。(3 分)
- ④ 一回目の母子分離。母親は退出。ストレンジャーは遊んでいる子どもにやや近づき，働きかける。(3 分)
- ⑤ 一回目の母子再会。母親が入室。ストレンジャーは退出。(3 分)
- ⑥ 2 回目の母子分離。母親も退出。子どもは一人残される。(3 分)
- ⑦ ストレンジャーが入室。子どもを慰める。(3 分)
- ⑧ 二回目の母子再会。母親が入室しストレンジャーは退出。(3 分)

この観察実験の結果，Ainsworth ら（1978）は乳児のアタッチメントの質を大きく 3 つに分類することが出来ることを示した。3 つのパターンは，A タイプが回避型，B タイプが安定型，C タイプがアンビバレント型で，それぞれのパターンの行動特徴については以下のようにになっている。

A タイプ（回避型）

養育者との分離の際に，さほど混乱や困惑した様子を示すことがない。そして，養育者が戻ってきても喜んで受け入れることなく，むしろ避けようとしたり，よそよそしくしたりする様子がある。また，実験室内では，養育者と関わることなく行動することが多い。

B タイプ（安定型）

養育者との分離時に，多少泣いたり混乱したりするが，再会時には養育者と積極的に身体接触を持とうとすることで，徐々に落ち着きが見られる。また，実験室内では母親を安全基地として探索する様子が見られる。

C タイプ（アンビバレント型）

分離時に非常に強い不安や混乱を起こす。再会時には、Bタイプ同様に身体的接触を積極的に求めるが、一方で怒りながら養育者を叩いたりする。全般的に、行動する際に用心深くなり不安定な様子を見せる。また、母親を安全基地として、探索活動を行うことが出来ない。

そして、Ainsworthら(1978)はこれらの愛着パターンがIWMの個人差となっていると仮定している。内在化された表象レベルでの愛着を表しているIWMにより、このような行動の個人差に結びついているのである。

また、それぞれのタイプによる他者と自己のとらえ方の違いについて、例えばAタイプの回避型を示す子どもは、一般的に他者は拒否的で援助を期待できない存在であると認識をしている。また、Bタイプの安定型を示す子どもは、他者は好意的で、かつ自己は援助される価値のある存在であると認識をもち、Cタイプのアンビバレント型を示す子どもは、他者に対して両義的な表象を持ち、自己不全感が強い。幼少期に形成されたIWMはその後の他者への認知の仕方や対人場面での行動にも色濃く反映される。それについて戸田(1991)は、IWMは個人が“安全感”を得られるように情報を解釈・評価し、後の行動プランを立てるための認知的ルールとして、その個人が子ども時代に両親との間で自らのdistressをどのようなやり方で解消してきたかという感情制御スタイルと関連していると述べている。しかし、一方で幼少期だけでIWMが決定付けられるわけではなく、青年期に入り恋人という新しい愛着対象ができることで、IWMの再構成が行われることも指摘されている(戸田,1991)。また、IWMの違いを測る尺度として、内的作業モデル尺度(戸田,1988,1989,1990)があるが、この尺度については第5章で取り上げる。

以上のように第1節ではIWMの概念について論じたが、次節では、これらの愛着パターンにより形成されたIWMが、現在の対人関係場面にどのように関わっているのかについて詳しく述べていく。

## 第 2 節 青年期の対人関係における「IWM」に関する研究

幼少期に形成された IWM が、その後の対人関係スタイルにどのような影響を及ぼしているのかについて、これまで様々な研究がなされている。例えば、Hazan&Shaver (1987) は、恋人との情緒的なきずなの形成過程が、幼少期における養育者との情緒的なきずなを形成するプロセスと類似すると考え、IWM が恋人との関係に影響を及ぼしていることを明らかにしている。

IWM は対人関係での出来事を解釈し処理するのを手助けするものであり、その人が他者とどのように付き合っていくのかを規定している。青年期における、他者と関わる際に生じる対人不安と IWM との関連について、安定得点が高いほど対人不安が高く、アンビバレント得点や回避得点が高い者は対人不安が高い傾向があることが分かっている(嶋野・鈴木・菅原, 2004)。また、子どもの IWM の安定性が学校適応に密接に関係していることも明らかとなっている(三浦, 2003; 粕谷, 2001)。このように、安定した IWM を持つ者はそうでない者に比べ、他者との関係において良好な関係を築くことができている可能性が高い。

また、IWM が現在の対人関係だけでなく、過去の対人関係の捉え方にも影響を与えている。山岸(1994, 2004)は、女子青年の過去から現在までの対人関係を中心とする経験や適応感をどう捉えているのかについて、IWM との関連について検討している。その結果、安定な枠組みを持つ者はアンビバレントな枠組みを持つ者に比べて、過去から現在までの対人関係を肯定的に捉える傾向が高いという結果を得ている。このことより、IWM が自身の対人関係スタイルの認知にも関連しているといえる。

IWM が現在や過去の対人関係を規定しているということは、対人関係の一つである友人関係にも影響を及ぼしているものと考えられる。安定した IWM を持つ者は対人不安が低いため、友人との付き合い方でも不安が少なく、友人と上手く付き合っていると予想できる。また、IWM は他者への期待の度合いを決めている要素ともいえるため、他者との付き合い方における理想にも影響を与えていると考えられる。そのため、対人関係の

中の友人関係においてもそのように考えられるのではないか。  
さらに、現在の友人関係の捉え方と理想とする友人関係における差にもその影響があるのではないかという考えのもと、第Ⅱ部で実証的研究を行う。

## 第 3 章 自己意識と自己意識特性

### 第 1 節 自己意識

自己意識について，これまで様々な研究がなされているが，その概念定義は研究者によって異なっている。一般的に，自己意識とは，意識の対象・焦点が自分自身にあることをさす（有斐閣辞典，1999）とされている。自己意識という言葉を初めに用いたのは Mead(1934)であり，その後 Duval&Wicklund,R.A. (1972) や Fenighstein,A.ら (1975) がそれぞれの自己意識理論を展開している。主に Mead, Duval&Wicklund,R.A., Fenighstein,A.らの自己意識の概念定義について以下にまとめていく。

#### a. Mead の自己意識に関する理論

私たちは，他者の存在に気付き，その他者が自分に対してどのような反応をするかに関心を持ったときに，自己を意識するようになる。そして，他者の見方や態度を取り込んでいくことで，その他者の視点から物事を見ようとし，結果的に自己意識をすることができるようになる。Mead (1934) はこのように“自己を他者が見るように客観的に捉えること”を，自己意識と呼んでいる。

#### b. Duval&Wicklund,R.A の客体的自己意識

Duval&Wicklund,R.A (1972) は，Mead (1934) の自己意識理論を発展させ，客体的自己意識理論を提唱した。Mead (1934) は，“自己を客観的に捉えること”を自己意識と呼んでいるが，Duval&Wicklund,R.A (1972) は“人が自己に注意を向けた状態”のことを自己意識と定義している。また，自己が意識や注意の対象とされた状態を客体的自覚状態と呼び，自己意識と同義として扱っている。Duval&Wicklund (1972) の客体的自己意識理論によれば，自己意識は自己が自他の観察対象になる過程で生じ，例えば鏡で自分の姿を見る，自分の声をテープなどで聞く，自分が映っている写真やビデオテープを観る，といった状況や他者の目を気にする状況などが自分に注意が向く刺激となるとしている。そして，自己に注意が向くこと



で人は自覚（自己意識）状態となり，自分のある側面で自己評価が行われる。

c. Fenighstein, A., Scheier, M.F. & Buss, A の自己意識理論  
Duval & Wickland (1972) が自己意識を“自分自身に注意が向いている状態”としたのに対し，Fenighstein, A.ら (1975) は，自己意識を“自分に注意を向けやすい性格特性”と定義している。Duval & Wickland (1972) と Fenighstein, A.ら (1975) の自己意識の定義は“自分自身に注意が向く”という点では似ているのだが，前者は自己意識を“状態”とし，後者は“性格特性”としている点で異なっている。本研究では，Fenighstein, A.ら (1975) の自己意識の定義を用いることとし，次節で Fenighstein, A.ら (1975) の自己意識特性について詳しく述べていくこととする。

## 第 2 節 自己意識特性

自己意識特性は，“自己に注意が向きやすい自己意識の特性”として Fenighstein, A.ら (1975) に定義され，さらにこの個人差を測定する尺度が考案されている。Fenighstein, A.ら (1975) によると，自己意識特性は 2 つの側面からなるとしている。自分の容姿や振る舞いや行動など他者から観察できる自己の外面的な側面へ注意が向かいやすい特性を公的自己意識，反対に感情や思考や態度など他者が観察できない自己の内面的な側面へ注意が向かいやすい特性を私的自己意識とし，この 2 つの間には中程度の相関が認められる。

この 2 つの意識特性が，行動，興味や関心などにそれぞれ異なった影響を与えているとして多くの研究で示されている。Cheek & Briggs (1982) は，2 つの自己意識がそれぞれアイデンティティの違った側面と関連しているとし，公的自己意識が強い人ほど社会的 identity を重視し，私的自己意識が強い人ほど個人的 identity を重視するという結果を得ている。例えば，公的自己意識が強い人は他者からの評価に敏感を気にした行動をしやすいため，他者の行動によって感情や自己評価が左右されやすく，意見の衝突を避けるなど，協調的で円滑な交際を行う傾向があるが，私的自己意識が強い人は自分の感情や態度や

権利に忠実に行動しやすい。つまり、公的自己意識は他者の視点に対する意識を高め、集団内の規範や意見に同調する傾向を促進し、私的自己意識は自己の感情や権利などの視点に対する意識を高め、内的価値観に従わせるといわれている（Carver & Scheier, 1983; Scheier, 1980; Fenigstein, 1979; 菅原, 1986）。

公的・私的自己意識特性はその特徴から、自己に関する特性や、さらには対人関係に関する特性との関連が検討されてきている。そこで、第3節では、公的・私的自己意識特性と自己に関する特性、対人関係や対人関係場面に関する特性との関連について検討されている研究についてまとめていく。

### 第3節 自己意識特性に関する諸研究

公的・私的自己意識特性は、自己に注意が向きやすい特性ということで、自己の静態的把握（押見, 1990）だけでなく、社会的行動や社会心理学的現象を説明する性格特性概念として注目を集めてきた（黒沢, 1993）。私的・公的自己意識特性は、例えば対人不安や罪悪感、恥など、特に対人関係に関する特性との関連が多く検討されてきた。

対人不安について、私的自己意識は心配や不安を増強させやすく、公的自己意識は対人的な不安や心配を高める（辻, 2004; 富田・水子・金光, 1999）といった指摘がある。また、男子の場合は、私的自己意識が強い人は孤独感が高く、そして孤独感の規定要因として男子は公的自己意識が関連している（諸井, 1987）といった報告もある。このように、私的・公的自己意識のような自分に注意が向きやすい特性が高い人は、対人場面において殊更、人と関わることに対する不安や人と接することで感じる孤独感を感じやすい。さらに、私的・公的自己意識特性は被害妄想的心性の特徴である被害妄想的な自己関連づけしやすく（金子, 1999）、さらに抑うつとの関連がある（Smith & Greenberg, 1981; 坂本, 1992; 渡辺, 2004）といった報告もあり、私的・公的自己意識が高まりすぎることによって、精神面に負担を与えることも少なくない。

また、私的・公的自己意識は人の道徳的行動や規範意識と密接に関わっているとことも明らかになっている。例えば、他者の目を気にしやすい公的自己意識は恥の意識を持ちやすく、自

己内省しやすい特徴をもつ私的自己意識が高い人は罪悪感を経験しやすい（有光，2001；小嶋，2008）ことが分かっている。公的自己意識が強い人は人前で恥ずかしい思いをしたくないことから逸脱した行動を避け，私的自己意識が強い人は自己がした行動に対し注意を向けることでその行動が適切だったのかをよく考える傾向があるといえる。また，公的自己意識が高い人は自己を取り巻く状況や他者に左右されやすいことからマナー違反が多く，反対に私的自己意識が強い人は集団や状況への所属感を得るような行動をしないため，公的なものの私的利用が多い傾向がある（山形，2005）ことも分かっている。公的自己意識は他者の目や評価を気にするというと点から，道徳性や規範意識が自己を取り巻く他者や状況に依存し，左右されやすいといえる。私的自己意識は，自己の信念や価値観，信条に重きを置くため願望と実行の間の差異が小さい（大平，1989）といえる。

以上のように，私的・公的自己意識は特に対人場面に関する行動や性格特性との関連度が高く，対人関係を説明する概念として取り上げられやすい。このような特徴を持つ私的・公的自己意識特性と友人関係との関連を検討した研究では，岡田（1999）が挙げられる。岡田（1999）は，大学生の友人関係について私的・公的自己意識との関連から検討している。この研究では，公的自己意識が高い者ほど自他の相違を意識しやすいため，自分がしている友人関係と自分の友人がしている友人関係は違うものであると認識している傾向があるが，一方で私的自己意識は自分の内面に注意が向かいやすい性格特性を表すため，友人関係に対するイメージには影響を与えていなかったという結果を得ている。さらに，私的自己意識は高得点者ほど理想と現実との間に強い正の相関があるとしている。このことから，友人関係においても私的自己意識が高い者は自分の信念や価値に従って行動するため，所属する集団や状況に囚われずに友人関係を築いていることを示唆している。しかし，この研究では，自己意識の高低により現実と理想の相関については検討されているものの，具体的に自己意識が友人との付き合い方における理想と現実にどのような関連があるのか，また友人との付き合い方の理想と現実の間に差が生じたときに，それをどの

ように感じているかについては言及していない。

そこで、本研究では自己意識特性が友人との付き合い方における理想と現実とどのような影響を与えているのか、また友人との付き合い方の理想と現実の間に差が生じたときに、自己意識特性の高低によりどのような影響を受けるのか、の2つに焦点をあて研究を進めていく。

## 第 4 章 信頼感に関する研究

### 第 1 節 概説

信頼感に関する研究は大きく分けて、Erikson (1959) を中心とする精神分析理論による基本的信頼感、Rotter (1967) を中心とする社会的学習理論による対人的信頼感、実験社会心理学におけるゲーム理論、の 3 つの方向から研究されてきている。Erikson (1959) は人生の時期を 8 つの段階にわけ、その 8 つの段階ごとに習得すべき発達課題があるとし、その最初の段階の心理社会的発達として「基本的信頼感」の形成を挙げている。Erikson (1959) は「基本的信頼感」の定義を、“自己と世界に対する一つの態度であり、他者に関しては一般に筋の通った信頼、自分自身に関しては信頼に値するという単純な感覚”としている。谷 (1996) は、Erikson (1959) の基本的信頼感の理論を基に、基本的信頼感尺度を作成した。その際、基本的信頼感の中心的な内容を示す「基本的信頼感」と、他者についての信頼感を表す「対人的信頼感」の 2 因子を抽出したが、基本的信頼感尺度が 2 つの異なる内容を測定していたとして、再度検討を加えている (谷, 1998)。その結果、Erikson (1959) の基本的信頼感の理論を反映している因子は「基本的信頼感」だけとし、「対人的信頼感」因子は「基本的信頼感」に比べ現在の人間関係の中で形成されるもので「基本的信頼感」とは異なる概念として結論付けた。

一方、Rotter (1967) は社会的学習理論をもとに信頼感を一般的特質ではなく学習によって獲得される特質として、信頼感の可変性と能動性を主張している。Rotter (1967) は他者や集団の言葉や約束などが信頼できるという期待を「対人的信頼感」として定義し、人間一般に対する信頼感として位置づけている。また、Rotter (1967, 1971) は、この信頼感は青年期などの段階でも獲得することが出来るとしている。天貝 (1995) は自身の研究において、対自的側面・対他的側面に着目した信頼感を測定する尺度を作成することで、信頼感が発達的変容をする可能性を見出し、Rotter (1967) の信頼感の理論を支持している。また、谷 (1998) の指摘する「対人的信頼感」は、Rotter (1967) の信頼感の概念に非常に近いものといえる。

なお本研究では，Erikson（1959）が提唱している基本的信頼感に則り，信頼感を測定する尺度として谷（1996）が作成した基本的信頼感尺度を用いた。よって，次節では，Eriksonの基本的信頼感の理論を詳しく取り上げる。

## 第2節 Eriksonが提唱した基本的信頼感

Erikson（1959）は，健康なパーソナリティの発達をライフ・サイクルの視点から，人生の時期を8つの段階に分け，各段階に応じて習得すべき発達課題を挙げている。人は，発達の各段階において，中心的な課題の習得が求められ，それぞれの段階での葛藤を解決することで次の段階へと移行される。また，発達段階ごとに，重要な対人関係を通して発達課題の習得が行われる。そこで，各時期における発達課題と重要な対人関係の範囲を表1の表に示す。

表 1 Erikson (1949) の各発達段階における発達課題

発達段階	発達課題(心理社会的危機)	重要な他者
乳児期	基本的信頼：不信	母親的人物
乳児前期	自律性：恥・疑惑	親的な人物(複数)
乳児後期	積極性：罪悪感	基本的家族
児童期	勤勉性：劣等感	近隣・学校
青年期	アイデンティティ： アイデンティティ拡散	仲間集団と外集団 指導性のモデル
成人前期	親密性：孤立	友情，性，競争， 協力の相手
成人後期	生殖性：停滞製	分業と協同の家庭
老年期	統合：絶望	人類・わが種族

基本的信頼感は、人生の時期の 8 つの段階の中でも、人生で発達させるべき精神的健康の第一の構成要素である (Erikson, 1959) といわれている。Erikson (1959) は人生の中で発達させるべき精神的健康の発達の第一段階は「基本的信頼感 対 基本的不信」と定義し、この 2 つの緊張した心理状態での葛藤の解決を通して発達が生じると論じている。基本的信頼感は、生後一年の経験から獲得される自己と世界に対する一つの態度であり、他者に関しては一般に筋の通った信頼、自分自身に関しては信頼に値するという単純な感覚を意味する (Erikson, 1959)。この基本的信頼感の影響はこの段階にのみ限定されず、その後の発達段階で、その傷つきという形ではっきりと輪郭を表すとされている。基本的信頼感の確立がされていないことで、

青年期における「時間的展望 対 時間的展望の拡散」でその問題が表れるとしている。

### 第3節 信頼感に関する諸研究

主に信頼感に関する研究は、Erikson (1959) の基本的信頼感の理論に沿った研究と Rotter (1969) の対人的信頼感に沿った研究が見られる。

Erikson (1959) の基本的信頼感の理論に沿って基本的信頼感尺度を作成した谷 (1995, 1998) は、出生後一年間の間に獲得される基本的信頼感と青年期の後期の発達課題である時間的展望の関連を検討している。その結果、基本的信頼感は、同一性の感覚における時間的連続性の形成と密接に関わっていることを明らかにしている。また、基本的信頼感は自己に関する感情や自己概念との関連についても検討されている。例えばアイデンティティとの関連や (田名場・佐々木・佐藤, 2001) 自尊心の形成 (浅井, 2006) などに影響を及ぼしていると言われてしている。さらに、自己の性格特性だけでなく対人場面での不安などの特性との関連も指摘されている (清水, 2009; 石井・谷口・加藤・青野・小牧・森上, 山野, 2008)。

Rotter (1969) の対人的信頼感の理論に関する研究によると、安定した自分に対する信頼および他人に対する信頼が、同一性獲得にあたって重要であること (天貝, 1995) や男子において対人的信頼感が低い者は孤独感が高いこと (諸井, 1986) などが明らかになっている。また、Rotter (1969) の対人的信頼感と同義ではないが、基本的信頼感尺度における対人的信頼感も Rotter (1969) のいう対人的信頼感と似たような概念定義を持つ。基本的信頼感尺度における対人的信頼感が低い人は、人と関わることを回避する傾向があること (田名場・佐々木・佐藤, 2001) が明らかにされている。

信頼感是人一般に対しての肯定的な概念を形成するため、安定した信頼感をもつ場合、自己に対する信頼があるため自己概念の獲得に結びつきやすく、さらに他者一般に対しては、他者は支持的であると感じているため、対人場面における問題を経験することが少ないといえる。そこで、対人場面における問題が少ないということは信頼感が安定している人は、友人との付



き合いにおいても良好であると考えられる。友人関係を信頼感の観点から検討した研究によると、基本的信頼感と対人的信頼感が高い者はありのままの自分で友人と深く関わる傾向がある（松永・岩元，2008）という結果が得られており、やはり現実の友人関係においても信頼感が影響を及ぼしていることが推測できる。また、他者や自己への信頼感の違いが理想とする友人関係のあり方にも影響を与えている可能性が高いと考えられる。そして、信頼感が安定しているということは、現実の友人との付き合い方が安定しているため、理想とする友人との付き合い方との間に差異が生じたとしても、他者と自己を信頼することが出来るため、その差異を問題としないと予想できる。

本研究では自己や他者一般への信頼感が現実の友人関係だけでなく、理想とする友人関係にも影響を与えているのではないかという観点を持ち、さらに現実の友人関係と理想とする友人関係の間に差異が生じていても、その差異をネガティブに捉えないのではないかと考えのもと調査を行うこととする。

## 第 II 部 実証的研究

## 第5章 友人関係の理想と現実の差異の大きさに関する検討【研究1】

### 第1節 目的

幼少期に形成された Internal Working model (以下 IWM) は現在の対人関係スタイルや対人関係場面にも影響を与えている (Hazan&Shaver, 1987; 嶋野・鈴木・菅原, 2004 など) と言われている。そこで、本研究ではまず IWM が実際の友人との付き合い方、また理想としている友人との付き合い方に実際にどの程度影響を与えているのか検討する。また、IWM の違いにより自己や他者に対する認識の違いが生じているという視点より、「実際の友人との付き合い方と理想とする友人との付き合い方にも差が出るのではないか」という仮説を立て、その検討を行っていく。

### 第2節 方法

#### <調査対象>

東北圏内の A 大学の学生 174 名に調査した。1 項目以上の未記入があるもの、または 1 項目につき 2 つ以上に印があるものを除外したところ、有効回答者は 159 名 (男性 67 名, 女性 92 名, 平均年齢 19.79 歳) であった (有効回答率 91.4%)。

#### <調査時期>

2009 年 1 月中旬に実施した。

#### <調査手続き>

学生に、無記名で友人関係に関するアンケートの回答を依頼した。アンケート用紙によって調査し、回答は講義の最初、もしくは最後に行い、実施後直ちに回収した。

<使用尺度>

- ① 内的作業モデル尺度 18項目, 5件法
- ② 友人との付き合い方に関する自己評価 4項目, 11件法

内的作業モデル尺度については, まず, 18全項目の因子分析を行い, 尺度の妥当性を検討する。その後, 下位尺度の合計得点を算出し, 友人との付き合い方イメージ尺度との関連を検討する。友人との付き合い方イメージ尺度については以下に詳しく説明をする。

#### 1) 内的作業モデル尺度

内的作業モデル尺度は, Hazan&Shaver (1987) のアタッチメント・スタイル測定尺度に基づき詫摩・戸田 (1988) によって作成された。この尺度は, 他者や自己についてどのように認識しているか, アタッチメント理論の観点から測定する尺度であり, 安定 (Secure), アンビバレント (Ambivalent), 回避 (Avoidant) の3つの下位尺度で構成されている。詫摩・戸田 (1988) によると, この尺度の3つの下位尺度は IWM の3つのタイプをよく反映しており, 安定 (Secure) は“たいていの人は自分を好いてくれており, すぐに知り合いができる。また, 気楽に人に頼ったり頼られたりすることができる”という心的表象を他の型よりも相対的に強く持つとされ, 回避 (Avoidant) は“人と親しくなったり, 親密な関係になることを嫌い, 他者を全面的には信用できない”という, アンビバレント (Ambivalent) は“自分を信頼できなく, 本当に人から好かれているかについても自信がない。人といつも一緒にいたがるので疎ましく思われている”という他者と自己に関する表象を相対的に強く持つとされる。

本研究では, この内的作業モデル尺度の内, それぞれの下位尺度から6項目ずつ計18項目を用いた。質問項目の形式は, 「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法とした。「あてはまる」—5点, 「あてはまらない」—1点とし, 分析を行った。

## 2) 友人との付き合い方に関する自己評価

これは自分が実際の友人との付き合い方に関する自己評価と自分が理想としている友人との付き合い方の自己評価を測定するために、筆者が作成した。落合・佐藤（1996）は、友人との付き合い方を「人との関わり方に関する姿勢」と「自分が関わろうとする友人の範囲」の2つの軸で4パターンに分類できるとした。「人との関わり方に関する姿勢」は内面の覚悟や姿勢を表すものとし、反対に「自分が関わろうとする友人の範囲」は外的な面を表すものとし、それぞれを深い－浅い、広い－狭いという概念を用いた。その概念を図にしたものを Fig 1 に示す。

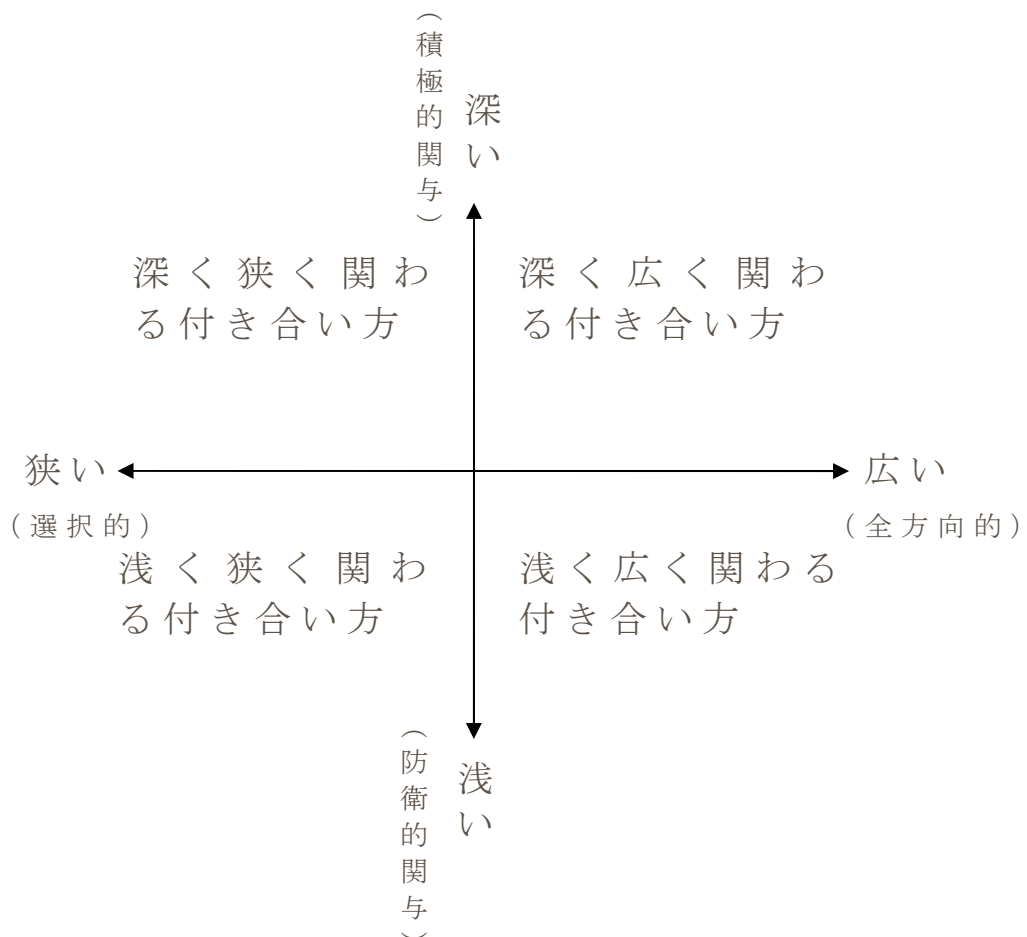


Fig 1 落合・佐藤（1996）による友人との付き合い方の4パターン

落合・佐藤（1996）の友人との付き合い方の2つの軸の概念を応用し，自分が認知している友人との付き合い方と自分が理想とする友人との付き合い方についての質問項目を作成した。質問項目の内容は，「友人とどのように付き合っていると思うか」という現実の友人との付き合い方と，「自分が望む友人との付き合い方はどのようなものか」という友人との付き合い方における理想について，0～10の11段階で求めた。なお，項目は自分がイメージしている友人との付き合い方，自分が理想としている友人との付き合い方について，深い－浅い，広い－狭いという2つの軸を用いた。10に近づくほど深く，（または広く），0に近づくほど浅く（または狭く），友人と付き合っている（付き合いたい）というように解釈し得点化した。この自己評価に関する質問紙については，Appendixを参照していただきたい。

### 第3節 結果

#### （1）内的作業モデル尺度の因子分析

内的作業モデル尺度 18項目について，主因子法による因子分析を行った。初期解の固有値は 3.941, 2.424, 2.154, 1.154・・・となっていたが，先行研究において3構造であることが分かっていることから，先行研究に従い抽出因子数を3因子に設定し，主因子法，バリマックス回転を行った。その際，因子負荷量を.35を基準としたところ，「私はいつも人と一緒にいたがるので，時々人から疎まれてしまう」という項目が基準を満たしていなかったため除外し，再度因子分析を行った。バリマックス回転を行って理由として，先行研究より3因子の相関関係が認められていないため，この回転が妥当と判断し実施した。最終的に回転後の固有値は第1因子が 2.941，第2因子が 2.236，第3因子が 1.586，回転後の累積寄与率は 37.6%であった。得られた各因子の負荷量，2乗和，寄与率を Table 1 に示す。

Table 1 内的作業モデル尺度のバリマックス回転後の因子負荷量（主因子法）

項 目	F1	F2	F3
<b>安定型</b> ( $\alpha = .832$ )			
私は知り合いが出来やすい方だ	.832	-.077	-.013
私はすぐに人と親しくなる方だ	.829	-.080	.026
初めて会った人とでも上手くやっっていける自信がある	.770	-.134	-.005
私は人に好かれやすい性質だと思う	.620	-.245	-.055
たいていの人は私のことを好いてくれると思う	.466	-.375	-.066
気軽に頼ったり頼られたりすることがある	.442	.129	-.032
<b>アンビバレント型</b> ( $\alpha = .742$ )			
あまり自分に自信が持てないほうだ	-.173	.676	-.065
本当は嫌々ながら私と親しくしているのではないかと思うことがある	-.034	.661	.120
時々友人が、本当は私のことを好いていてくれないのではないか、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある	-.003	.655	.057
ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう	-.135	.593	-.038
自分を信用できないことがよくある	-.008	.438	.142
<b>回避型</b> ( $\alpha = .659$ )			
どんなに親しい間柄であろうと、あまり馴れ馴れしい態度をとられると嫌になってしまう	.101	.005	.593
あまりにも人と親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められると、イライラしてしまう。	.004	.015	.540
あまり人と親しくなるのは好きでない	-.288	.043	.535
人は全面的に信用できないと思う	-.021	.250	.479
私は人に頼らなくても、自分一人で十分に上手くやっっていけると思う	-.040	-.066	.470
人に頼るのは好きではない	.004	.079	.374
2 乗 和	2.914	2.190	1.573
寄 与 率	17.140	12.880	9.252

第 1 因子は、「私は知り合いが出来やすい方だ」「私はすぐに人と親しくなる方だ」など 6 項目で、他者は協力的で自己は他者に助けてもらえる価値がある存在であるという認識を表す項目となり、詫摩・戸田（1988）の「安定（Secure）」因子と項目が一致したため、本研究でも原典に従い「安定（Secure）」因子とする。第 2 因子は「あまり自分に自信が持てないほうだ」「本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」など 5 項目からなり、自己や他者に疑念を持つような態度や感情を表す項目となっていた。この因子では、1 項目が因子分析の際に除外したが、それ以外の項目は詫摩・戸田（1988）と項目が一致しているため、原典にならい相反する感情や態度を同時に持つ「アンビバレント（Ambivalent）」因子と呼ぶこととする。第 3 因子は「どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう」「あまりにも人に親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められると、イライラしてしまう」など 6 項目からなり、他者を全面的に信頼することは出来ないという認識をもち、自分一人でなんでも出来るという自信を持つような項目となっている。この因子も、第 1 因子や第 2 因子同様に詫摩・戸田（1988）の尺度と項目が一致しているため、原典に従い「回避（Avoidant）」因子とした。なお、各因子別に Table 1 で示した項目を用い、各因子の信頼性を検討するため  $\alpha$  係数を算出したところ、第 1 因子「安定（Secure）」因子は .832、第 2 因子「アンビバレント（Ambivalent）」因子は .742、第 3 因子「回避（Avoidant）」因子は .659 で、第 3 因子の  $\alpha$  係数が .70 に届かないものの、各尺度の内部一貫性はある程度保たれているといえる。

## （2）下位尺度の相関係数

各下位尺度の関係を検討するため、Pearson の相関係数を算出した。なお、内的作業モデル尺度については下位尺度得点を算出し、下位尺度の得点とした。以下に各因子の相関を表に示した（Table 2）。表を作成するにあたり、内的作業モデルの下位尺度については、「安定（Secure）」因子は **S** と、「アンビバレント（Ambivalent）」因子は **Am** と、「回避（Avodant）」因



子は **Av** と表した。さらに、現実に行っていると認識している友人との付き合い方に関する自己評価について、「人との関わり方に関する姿勢」は**深さ現実**と、「自分が関わろうとする友人の範囲」は**広さ現実**と表した。また、理想としている友人との付き合い方に関する自己評価については、「人との関わり方に関する姿勢」は**深さ理想**と、「自分が関わろうとする友人の範囲」は**広さ理想**と表した。

**Table 2** 内的作業モデル尺度と友人との付き合い方イメージ尺度の相関係数

	S	Am	Av	深さ現実	広さ現実	深さ理想	広さ理想
S		-.048	-.006	.210**	.639***	.182*	.425***
Am			.036	-.125	-.049	-.051	-.031
Av				-.177*	-.130	-.321***	-.176*
深さ／現実					.221**	.739***	.257**
広さ／現実						.254**	.679***
深さ／理想							.407**
広さ／理想							

\*\*\*.相関係数は 0.1%水準で有意 (両側)

\*\* . 相関係数は 1%水準で有意 (両側)

\*. 相関係数は 5%水準で有意 (両側)

**a.** 友人との付き合い方に関する自己評価内の関連

友人との付き合い方に関する自己評価において、現実と理想との間に高い正の相関が見られた。まず、友人と深く付き合っているという自己評価の人は、理想においても深く付き合いたいと望む傾向が高く ( $r = .739$ ,  $p < .001$ )、広さについても同様に、広く友人と付き合っているという自己評価をもつ人は、理想においても広く付き合いたいと望む傾向がある ( $r = .679$ ,  $p < .001$ )。また、深く友人と付き合いたいと望む人は、同様に広く友人と付き合いたいと望む傾向がある ( $r = .407$ ,  $p < .01$ )。

b. 内的作業モデル尺度と友人との付き合い方に関する自己評価の関連

まず、安定 (Secure) は「人との関わり方に関する姿勢 (深さ)」と、「自分が関わろうとする友人の範囲 (広さ)」の現実と理想ともに正の相関が見られた。「人との関わり方に関する姿勢」は現実と理想ともに弱い正の相関が (深さ現実 :  $r = .210$ ,  $p < .01$  深さ / 理想 :  $r = .182$ ,  $p < .05$ ), さらに「自分が関わろうとする (関わりたい) 友人の範囲」とは中程度の正の相関が認められた (広さ現実 :  $r = .639$ ,  $p < .001$  広さ理想 :  $r = .425$ ,  $p < .001$ )。

次に、アンビバレント (Ambivalent) は「人との関わり方に関する姿勢」, 「自分が関わろうとする姿勢」の現実と理想の友人との付き合い方のいずれにおいても相関は見られなかった。

回避 (Avoidant) は, 「人との関わり方に関する姿勢」, 「自分が関わろうとする友人の範囲」の現実と理想の友人との付き合い方の内, 「自分が関わろうとする友人の範囲 (広さ現実)」を除く項目と負の相関が見られた (深さ現実 :  $r = -.177$ ,  $p < .05$  深さ理想 :  $r = -.321$ ,  $p < .001$  広さ理想 :  $r = -.176$ ,  $p < .05$ )。特に, 回避 (Avoidant) の得点が高い人は, 友人と深く関わることを望まない傾向があるといえる。

以上の結果より, IWM の下位尺度の得点により, 友人との付き合い方の認識や理想とする友人との付き合い方に違いがあることが示唆される。

### (3) 仮説の検証

研究 1 では, IWM の違いにより自己や他者に対する認識の違いが生じているという視点より, 「実際の友人との付き合い方と理想とする友人との付き合い方にも差が出るのではないか」という仮説を立てた。仮説の検証を行う前に, IWM が実際の友人との付き合い方や理想としている友人との付き合い方をどの程度予測しうるかを調べるために, 内的作業モデル尺度の下位尺度 3 つを説明変数, 友人との付き合い方に関する自己評価の 4 つをそれぞれ目的変数として, 重回帰分析を行った。結果をパス図として示す (fig 2~4)。

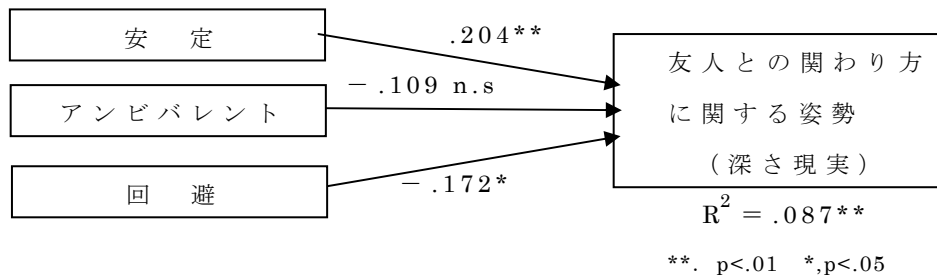


fig 2 内的作業モデル尺度の下位尺度を説明変数，友人との付き合い方イメージの「友人との関わり方に関する姿勢（深さ現実）」下位尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

「友人との関わり方に関する姿勢（深さ現実）」については，この3因子の中で安定 (Secure) 尺度の得点が影響を与えていることが示された。しかし，決定係数が低いため，それほど大きな要因となっているとはいえない。

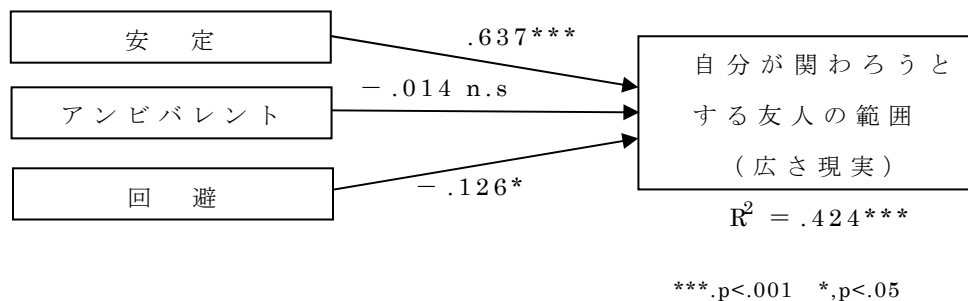


fig 3 内的作業モデル尺度の下位尺度を説明変数，友人との付き合い方イメージの「自分が関わろうとする友人の範囲（広さ現実）」下位尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

「友人と関わろうとする範囲（広さ現実）」については，IWM の安定 (Secure) 尺度得点の影響が大きく，決定係数も.424 と値も大きくなっている。よって，安定 (Secure) 尺度の得点が高いほど友人と関わろうとする範囲が広いと認識しているといえる。

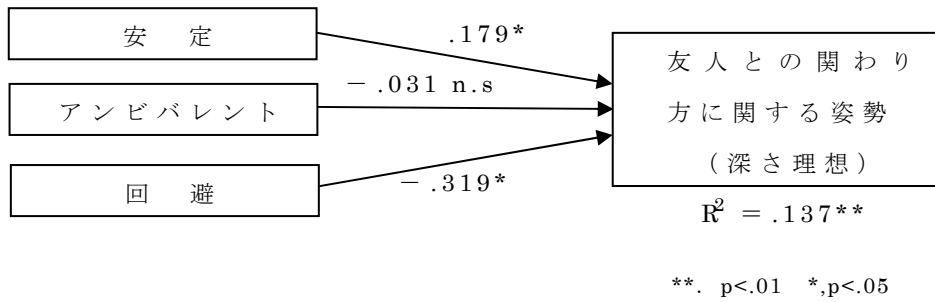


fig 4 内的作業モデル尺度の下位尺度を説明変数，友人との付き合い方イメージの「友人との関わり方に関する姿勢（深さ理想）」下位尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

「友人との関わり方に関する姿勢（深さ理想）」は，回避（Avoidant）尺度得点の影響を受けている。回避（Avoidant）尺度の得点が高い者は深さの理想が低いといえる。

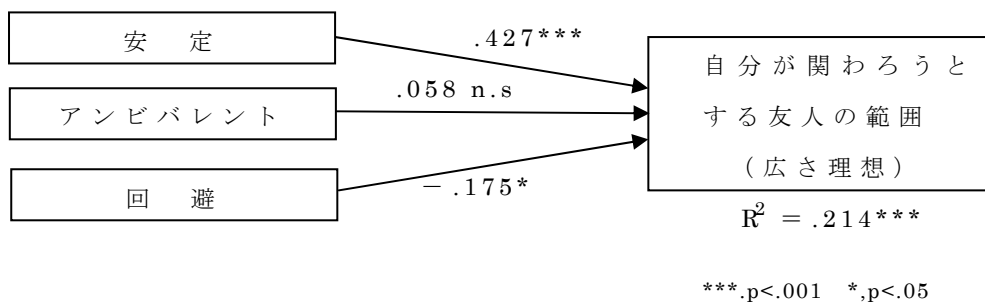


fig 4 内的作業モデル尺度の下位尺度を説明変数，友人との付き合い方イメージの「自分が関わろうとする友人の範囲（広さ理想）」下位尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

「自分が関わろうとする友人の範囲（広さ理想）」は安定（Secure）尺度の影響を受けていることが明らかとなった。安定（Secure）尺度の得点が高い人は，広い範囲の友人と関わりたいと思う傾向が強い。

重回帰分析の結果，内的作業モデルが実際の友人との付き合い方や理想とする友人との付き合い方に影響を与えていることが明らかとなった。IWMのパターンにより実際の友人との付き合い方が違っており，特に安定(Secure)尺度や回避(Avoidant)尺度が友人関係に影響を与えているといえる。さらに，今回の研究より，IWMが実際の友人関係スタイルだけでなく，理想とする友人関係へも影響を与えていることが示唆された。

次に，仮説の検証にうつる。IWMが友人との付き合い方における理想と現実の差異にも影響を与えているのではないかと，という仮説を検証するために，まず，友人との付き合い方イメージにおける「友人との関わり方に関する姿勢(深さ)」と「自分が関わりたい友人の範囲」のそれぞれの理想から現実を引いたものを，友人との付き合い方における理想と現実の差異得点とした。その後，内的作業モデル尺度の下位尺度を説明変数とし，友人との付き合い方における理想と現実の差異得点を目的変数とし重回帰分析を行い，IWMにより友人との付き合い方における理想と現実の差異が予測できうるかを検討した。その結果を，パス図として以下に示す (fig 6, 7)。

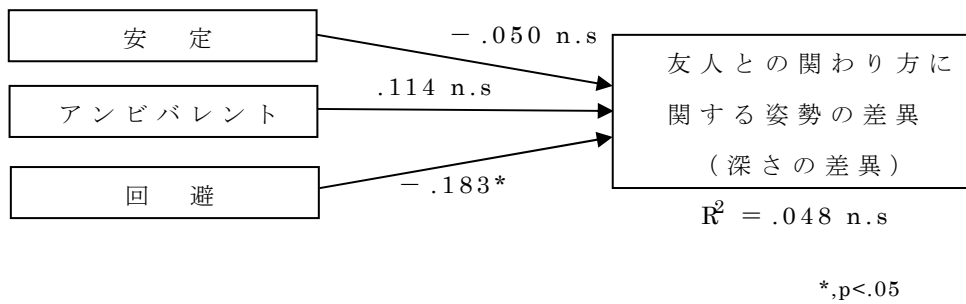


fig 6 内的作業モデル尺度の下位尺度を説明変数，友人との付き合い方イメージの「友人と関わり方に関する姿勢」における現実と理想の差異を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係）を示す

「友人との関わり方に関する姿勢の差異（深さの差異）」については，IWMの下位尺度の影響を受けていないという結果となった。

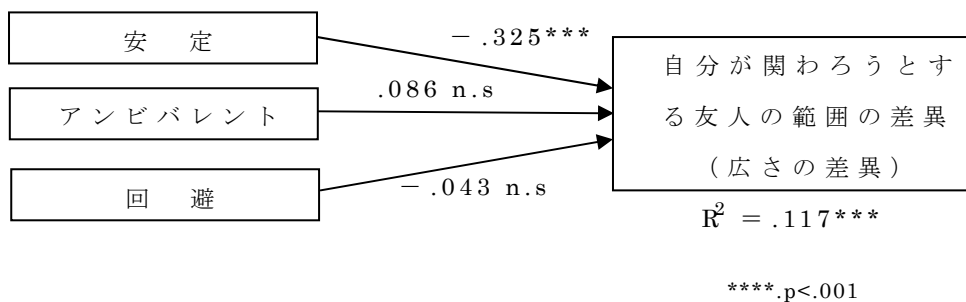


fig 7 内的作業モデル尺度の下位尺度を説明変数，友人との付き合い方イメージの「自分が関わろうとする友人の範囲」における現実と理想の差異を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係）を示す

「自分が関わろうとする友人の範囲の差異（広さの差異）」に関しては，安定 (Secure) 尺度の得点が負の影響を与えていた。安定 (Secure) 尺度の得点が高い人ほど，広さの差異は小さくなる傾向が示された。

重回帰分析の結果、友人との付き合い方における理想と現実の差異の内、「友人との関わり方に関する姿勢の差異（深さの差異）」は IWM の影響をほぼ受けていないという結果となった。よって、「友人との関わり方に関する姿勢の差異（深さの差異）」は IWM に関係なく生じると示唆される。また、「自分が関わろうとする友人の範囲の差異（広さの差異）」は IWM のうち安定（Secure）の影響を受けていることが明らかとなった。IWM の内安定（Secure）が高い人、つまり他者は協力的と認識し、自己は援助される価値があるという認識が高い人は、友人と関わる範囲に差異が生じにくいと示唆される。

#### 第 4 節 考察

##### (1) IWM と現実の友人との付き合い方に関する認識の関連

安定（Secure）尺度の得点が高い人は、自分は友人と深く関わる付き合い方をしていると認識している傾向がある。しかし、決定係数が高くないので（ $R^2=.087$ ,  $p<.01$ ）大きな影響を及ぼしているとはいえないが、無視できない程度の影響を与えていると解釈できる。同様に、安定（Secure）尺度の得点が高い人は、自分は広い範囲の友人と関わっていると認識している傾向があり、決定係数も十分に高い（ $R^2=.424$ ,  $p<.001$ ）。そのため、IWM が安定していることで、友人との関わり方が全方向的だと認識しやすいことが明らかとなった。

以上より、他者は好意的であり自分は援助される価値があるという認識ができる IWM を持つ人は、自分の対人関係を肯定的に捉えることができることが示唆される。

##### (2) IWM と理想とする友人との付き合い方の関連

「友人との関わり方に関する姿勢（深さ理想）」では、回避（Avoidant）尺度の得点が高い人は人と深く関わることを望んでいない傾向がある（ $R^2=.137$ ,  $p<.01$ ）。「自分が関わろうとする友人の範囲（広さ理想）」では、安定（Secure）尺度の得点が高い人は広い範囲の友人と付き合うことを望む傾向が認められた（ $R^2=.214$ ,  $p<.001$ ）。

他者と親しくなることを避ける傾向を持つ IWM を持つ人は、やはり理想としてもそれを望む傾向があることが本研究でも認められた。また、他者や自己に対する認識が安定している人は、

広い範囲人と友人になることを望む傾向が見られ、IWMの違いが、実際の友人関係スタイルだけでなく、友人関係に関する理想にも影響を与えていることを明らかにすることが出来た。

(3) IWMと友人との付き合い方における理想と現実の差異との関連

「友人との関わり方に関する姿勢の差異（深さの差異）」はIWMの影響を受けていないことが分かった（ $R^2=.48$ ,  $p>.05$ ）。さらに、「自分が関わろうとする友人の範囲の差異（広さの差異）」に関しては、IWMの安定（Secure）尺度の得点が高いほど差異が小さい傾向が認められた（ $R^2=.117$ ,  $p<.001$ ）。

この結果は、IWMの違いが必ずしも友人との付き合い方における理想と現実の差異に影響を与えているとはいえないことを示唆している。



## 第 6 章 友人関係の理想と現実の差異の個人差に関する検討【研究 2】

### 第 1 節 目的

友人関係に関する理想と現実の差異が生まれた場合に，差異をどの程度意識しやすいのかは個人によって異なる。研究 1 では，理想と現実の差異の大きさと IWM との関連について検討したが，研究 2 では理想と現実の差異をどの程度意識しているかについて，検討を加えていく。

検討を加えていくにあたり，

- ① 自己意識特性のうち，公的自己意識が高い人は他者の目を気にするため，現実と理想の付き合い方の差を認めた時に，その差異を気にしやすいのではないか。また，私的自己意識が高い人は信念や価値観と実際の行動に一貫性が見られるので，現実と理想の付き合い方の差を気にしないのではないか。
- ② 現実と理想の差異が生じる場面に出くわした時に，自分への信頼感や他者への信頼感が高い人は，その差異があっても友人と上手く付き合うことが出来るという認識ができ，その差異を意識しないのではないか。

という 2 つの仮説を立てた。

なお，調査 2 では実際に理想とする友人との付き合いと現実の友人との付き合い方の差の大小は問題としないこととする。

### 第 2 節 方法

#### < 調査対象 >

東北圏内の A 大学の学生 333 名に調査した。1 項目以上の未記入があるもの，または 1 項目につき 2 つ以上に印があるものを除外したところ，有効回答者は 317 名（男性 115 名，女性 202 名，平均年齢 19.7 歳）であった（有効回答率 95.2%）。

#### < 調査時期 >

2009 年 11 月下旬に実施した。

### < 調査手続き >

学生に、無記名で友人関係に関するアンケートの回答を依頼した。アンケート用紙によって調査し、回答は講義の最初、もしくは最後に行い、実施後直ちに回収した。

### < 使用尺度 >

- ① 基本的信頼感尺度 8項目, 5件法
- ② 自己意識特性尺度 10項目, 5件法
- ③ 友人関係尺度 10項目, 5件法 (4件法)

これらの尺度については、まず、それぞれの尺度ごとに因子分析を行い、尺度の妥当性を検討する。次に、下位尺度の合計得点を算出し、下位尺度間の相関を求めた。因子ごとの関連について検討した後、仮説検証のための分析を加えていく。

#### 1) 基本的信頼感尺度

基本的信頼感尺度は、谷(1996)により作成されたものであり、「基本的信頼感」尺度と「対人的信頼感」尺度の2つの下位尺度からなる尺度である。「基本的信頼感」は、Erikson(1959)のいう基本的信頼感に相当するものであり、「対人的信頼感」は現実の人間関係に基づく一般的な他者に対する信頼感を表している。

本研究では、谷(1996)が作成した基本的信頼感尺度の11項目の内、それぞれの下位尺度から4項目ずつ用いた。質問項目の形式は「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法とした。「あてはまる」-5点、「あてはまらない」-1点とし、逆転項目は逆転処理を実施してから、分析を行った。

#### 2) 自己意識特性尺度

自己意識特性尺度は、菅原(1984)によって作成された尺度で、Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975)の自己意識尺度の項目を参考として、26項目を独自に作成・編集されたものである。自己意識特性(自意識特性)とは、自分自身にどの程度注意を向けやすいのかであり、自分の外見や振る舞いなどの他人から見られる自己の側面に注意を向ける程度を表す公

的自己意識と、自分の気分や感情などの自己の内面に関する側面に注意を向ける程度を表す私的自己意識の2つの側面がある。自己意識特性尺度は、この2つの側面を測定する、「公的自己意識」尺度と「私的自己意識」尺度の下位尺度で構成されている。

本研究では、菅原（1984）によって作成された自己意識特性の中から、それぞれの下位尺度から5項目を選出し用いた。質問項目の形式は「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法とした。「あてはまる」－5点、「あてはまらない」－1点とし、逆転項目は逆転処理を実施してから、分析を行った。

### 3) 友人関係尺度

岡田（1995）によって作成された友人関係尺度は、青年期の友人関係の特徴を測定する尺度である。この尺度は、友人を気遣いながら関わる「気遣い」尺度、友人と深く関わることを避ける関わり方をする「ふれあい回避」尺度、集団で表面的な面白さを求める「群れ」尺度の3つの下位尺度で構成されている。

本研究では、岡田（1995）が作成した友人関係尺度の中で、岡田（1999）を参考にし、「ふれあい回避」尺度と「群れ」尺度の2つの下位尺度を用いることとした。項目はそれぞれ下位尺度ごとに意図的に選出した5項目を用いた。また、項目は変えずに（1）現在のつきあい方、（2）理想としているつきあい方、（3）現在のつきあい方と理想としているつきあい方に差があるとしたら気になるか、について回答してもらった。質問項目の形式は（1）と（2）に関しては「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法とした。「あてはまる」－5点、「あてはまらない」－1点とし、逆転項目は逆転処理を実施してから、分析を行った。また、（3）に関しては、友人との現在のつきあい方と理想としているつきあい方に差があるとしたとき、「気になる」「少し気になる」「気にならない」「あまり気にならない」の4件法とした。「気になる」－4点、「気にならない」－1点として分析を行った。

### 第 3 節 結果

#### (1) 各尺度の因子分析

##### a. 基本的信頼感尺度の分析

基本的信頼感尺度 8 項目に対して最尤法による因子分析を行った。初期解の固有値の変化は、2.547, 1.587, 0.916…というものであり、第 2 因子までが固有値 1 以上であるため、2 因子構造が妥当であると考えた。さらにスクリープロットを参考にし、2 因子が妥当と判断した。また、もともとの尺度に関しても 2 因子であるため抽出因子数を 2 因子に設定し、最尤法、プロマックス回転で因子分析を行った。プロマックス回転を行った理由として、先行研究より 2 つの因子の相関関係が認められていたため、この回転が適当と判断し行った。最終的に回転後の固有値は第 1 因子が 1.783, 第 2 因子が 1.555, 回転前の累積寄与率は 38.2%であった。得られた各因子の負荷量と因子間相関を Table 1 に示す。

Table 1 基本的信頼感尺度のプロマックス回転後の因子負荷量（最尤法）

項 目	F1	F2
<b>基本的信頼感 (<math>\alpha = .72</math>)</b>		
人から見捨てられたのではないかと心配になることがある	.846	.070
自分自身のことが信頼出来ないと感じることがある	.640	.046
失敗すると、二度と立ち直れないような気がする	.518	.002
人生に対して、不信感を感じるがある	.485	-.166
<b>対人的信頼感 (<math>\alpha = .63</math>)</b>		
一般的に、人間は信頼できるものであると思う	-.040	.873
普通、人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う	.084	.574
自分が困ったときには、周りの人々からの援助が期待できる	-.110	.376
周囲の人々によって自分が支えられていると感じる	.038	.365
因子相関	F1	F2
	F2	-.302

第1因子は、「人から見捨てられたのではないかと心配になることがある」など4項目からなり、谷（1996）による「基本的信頼感」因子の項目で構成されていたため、本研究でも原典通りの因子名とする。第2因子は、「一般的に、人間は信頼できるものであると思う」など4項目からなり、これも第1因子同様に谷（1996）の下位尺度どおりの結果となったため、原典同様「対人的信頼感」因子とする。

なお、各因子別に Table 1 で示した項目を用い、各因子の  $\alpha$  係数を算出したところ、第1因子「基本的信頼感」は.72、第2因子「対人的信頼感」は.63で、各尺度の内部一貫性は保たれているといえる。

#### b. 自己意識特性の因子分析

自己意識特性尺度 10 項目に対して最尤法による因子分析を行った。初期解の固有値の変化は、3.987, 2.057, 0.830…というものであり、第2因子までが固有値1以上であるため、2因子構造が妥当であると考えた。さらにスクリープロットを参考にし、2因子が妥当と判断した。また、もともとの尺度に関しても2因子であるため抽出因子数を2因子に設定し、最尤法、プロマックス回転で因子分析を行った。プロマックス回転を行った理由として、信頼感尺度同様に先行研究より2つの因子の相関関係が認められていたため、この回転が適当と判断し行った。最終的に、第1因子の固有値は3.286、第2因子の固有値は2.442となり、回転前の累積寄与率は51.32%であった。得られた各因子の負荷量と因子間相関を Table 2 に示す。

Table 2 「自己意識特性尺度」Promax 回転後の因子負荷量（最尤法）

項 目	F1	F2
<b>公的自己意識 (<math>\alpha=.88</math>)</b>		
自分がどう思われているのか気になる	.882	-.121
自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	.812	.037
人前で何かをする時、自分のしぐさや姿が気になる	.755	.022
自分についての噂に関心がある	.739	-.011
他人からの評価を考えながら行動する	.655	.058
<b>私的自己意識 (<math>\alpha=.76</math>)</b>		
しばしば、自分の心を理解しようとする	-.043	.839
自分が本当は何をしたいのかを考えながら行動する	-.054	.713
自分がどんな人間なのか自覚しようとしている	.144	.648
他人を見るように自分をながめてみることもある	-.038	.510
気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ	.139	.414
	因子相関 F1	F1
	F2	-.338

第1因子は、「自分がどう思われているのか気になる」など5項目からなり、元の尺度である「公的自己意識」因子と項目が一致していたため、原典通りの「公的自己意識」因子と命名した。第2因子は、「しばしば、自分の心を理解しようとする」など5項目からなり、第2因子に関しても菅原（1984）の「私的自己意識」因子と項目が一致していたため、原典同様に「私的自己意識」因子と命名した。なお、各因子別に Table 2 で示した項目を用い、各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子「公的自己意識」は.88、第2因子「私的自己意識」は.76で共に高い数値を示していたため、各因子の内部一貫性は保たれているといえる。

### c. 友人関係尺度の因子分析

原典同様の尺度の結果が得られるかを確かめるために、ここでは「現実の友人とのつきあい方」の10項目について因子分析を行った。友人関係尺度10項目に対して主因子法による因子分析を行った。初期解の固有値の変化は、3.068, 1.872, 1.148…というものであり、第3因子までが固有値1以上であった。

さらにもともとの尺度が 2 因子構造であったため，それを考慮し抽出因子数を 2 因子に設定して，主因子法，バリマックス回転で因子分析を行った。バリマックス回転を行った理由としては，先行研究でバリマックス回転による因子分析を行っていたため，本研究でもそれにならいバリマックス回転で因子分析を行った。最終的な固有値は，第 1 因子で 2.037，第 2 因子で 1.857 となり，累積寄与率は 38.4%であった。得られた各因子の負荷量，2 乗和，寄与率を Table 3 に示す。

Table 3 「友人関係尺度」バリマックス回転後の因子負荷量(主因子法)

項 目	F1	F2
<b>群れ (<math>\alpha = .73</math>)</b>		
ウケるようなことをする	.822	-.104
友達に冗談を言って笑わせる	.819	-.134
楽しい雰囲気になるように気を使う	.486	.130
みんなで一緒にいることが多い	.472	-.297
一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	.329	-.165
<b>ふれあい回避 (<math>\alpha = .70</math>)</b>		
お互いのプライバシーには入らない	-.033	.759
お互いの領分に踏み込まない	-.008	.742
相手に甘えすぎない	-.152	.500
相手のいうことに口をはさまない	-.069	.432
心を打ち明ける (*)	-.310	.364
2 乗 和	2.037	1.857
寄 与 率	20.373	18.571

\*は逆転項目

第 1 因子は，「ウケるようなことをする」など 5 項目からなり，岡田(1995)の「群れ」因子と項目が一致したため，本研究でも原典通りに「群れ」因子と呼ぶこととする。第 2 因子は「ウケるようなことをする」など 5 項目からなり，第 1 因子同様に岡田(1995)と項目が一致したため「ふれあい回避」因子と呼ぶこととする。なお，各因子別に Table 3 で示した項目を用い，各因子の  $\alpha$  係数を算出したところ，第 1 因子「群れ」は.78，第 2 因子「ふれあい回避」は.70 で，各尺度の内部一貫性は保たれている

といえる。

## (2) 下位尺度との相関

各因子の関係を検討するため、それぞれの下位尺度の得点を合計し、Pearsonの相関係数を算出した (Table 4)。友人関係尺度に関しては、同じ項目をそれぞれ用いて、「友人と実際していると思う付き合い方」、「友人との理想とする付き合い方」、「友人と実際にしている付き合い方と友人との理想とする付き合い方の間に差異があったときにどの程度気になるか」を測定している。そこで、「友人と実際していると思う付き合い方」に関する群れ、ふれあい回避のそれぞれの尺度得点を群れ (現在)、ふれあい回避 (現在) とし、「友人との理想とする付き合い方」に関しては群れ (理想)、ふれあい回避 (理想)、「友人と実際にしている付き合い方と友人との理想とする付き合い方の間に差異があったときにどの程度気になるか」に関しては群れ (気になる)、「ふれあい回避 (気になる) と表すこととした。



Table 4 下位尺度ごとの相関係数

	基本的信頼感		対人的信頼感		公的自己意識		私的自己意識	
	群れ (現実)	ふれあい回避 (現実)	群れ (理想)	ふれあい回避 (理想)	群れ (気になる)	ふれあい回避 (気になる)		
基本的信頼感			-.227**		.462**			.231**
対人的信頼感					.048			.011
公的自己意識								.294**
私的自己意識								
基本的信頼感	.028	.049	-.013	.073	.226**	.302**		
対人的信頼感	.245**	-.254**	.285**	-.264**	-.011	-.068		
公的自己意識	.276**	-.080	.305	-.118*	.215**	.309**		
私的自己意識	.084	.142*	-.012	.074	.080	.075		
群れ(現実)		-.289**	.520**	-.024	.060	.132*		
ふれあい回避(現実)			-.260**	.420**	.021	-.057		
群れ(理想)				-.056	.155**	.076		
ふれあい回避(理想)					-.040	.019		
群れ(気になる)								.574**
ふれあい回避(気になる)								

\*\*．相関係数は1%水準で有意（両側）

\*．相関係数は5%水準で有意（両側）

#### a. 基本的信頼感尺度と友人関係尺度との関連

まず、基本的信頼感尺度における基本的信頼感と実際の友人関係との間には相関が見られなかった（群れ（現実）： $r = .028$  ふれあい回避（現実）： $r = .049$ ）。対人的信頼感と実際の友人関係を測定した友人関係尺度における群れ（現実）との間には正の相関が（ $r = .245$ ,  $p < .01$ ），また、対人的信頼感とふれあい回避（現実）の間には負の相関（ $r = -.254$ ,  $p < .01$ ）が見られた。

次に、基本的信頼感尺度と友人との理想とする付き合い方との関連は、実際の友人関係同様、基本的信頼感について有意な相関は見られなかったが（群れ（理想）： $r = -.013$ ,  $p > .05$  ふれあい回避（理想）： $r = .073$ ,  $p > .05$ ），対人的信頼感との間には有意な相関が見られた（群れ（理想）： $r = .285$ ,  $p < .01$  ふれあい回避（理想）： $r = -.264$ ,  $p < .01$ ）。

基本的信頼感尺度と理想と現実の差異をどの程度気にするかについては、基本的信頼感については有意な正の相関が見られたが（群れ（気にな

る) :  $r = .226$ ,  $p < .01$  ふれあい回避 (気になる) :  $r = .302$ ,  $p < .01$ , 対人的信頼感とは有意な相関が認められなかった (群れ (きになる) :  $r = -.011$ ,  $p > .05$  ふれあい回避 (気になる) :  $r = -.068$ ,  $p > .05$ )。

#### b. 自己意識特性尺度と友人関係尺度との関連

自己意識特性と実際の友人との付き合い方については、公的自己意識特性は群れ (現実) 尺度の得点と有意な正の相関 ( $r = .276$ ,  $p < .01$ ) が、また私的自己意識特性尺度の得点についてはふれあい回避 (現実) 尺度の得点と弱い正の相関が見られた ( $r = .142$ ,  $p < .05$ )。

また、自己意識特性と友人との理想としている付き合い方との間には、公的自己意識特性尺度の得点とふれあい回避 (理想) 尺度の得点との間に弱い負の相関が見られた ( $r = -.118$ ,  $p < .05$ ) が、私的自己意識特性尺度の得点との間には有意な相関は認められなかった (群れ (理想) :  $r = -.012$ ,  $p > .05$  ふれあい回避 (理想) :  $r = .074$ ,  $p > .05$ )。

自己意識特性と理想と現実の差異をどの程度気にするかについては、公的自己意識特性尺度の得点が高いほど群れ (気になる) 尺度得点、ふれあい回避 (気になる) 尺度得点も高くなる傾向が認められた (群れ (気になる) :  $r = .215$ ,  $p < .01$  ふれあい回避 (気になる) :  $r = .309$ ,  $p < .01$ )。

#### c. 友人関係尺度内の関連

友人との実際にしている付き合い方と友人との理想とする付き合い方では、群れ尺度、ふれあい回避尺度ともに実際の付き合い方と理想とする付き合い方に有意な正の相関が見られた。言い換えると、実際の友人との付き合い方で群れ (現実) 尺度の得点が高い人は理想としている付き合い方でも群れ (理想) 尺度の得点も高く ( $r = .520$ ,  $p < .01$ )、また同様に実際の友人との付き合い方でふれあい回避 (現実) 尺度の得点高い人は、理想としている付き合い方でもふれあい回避 (理想) 尺度の得点が高くなる傾向がある ( $r = .420$ ,  $p < .01$ )。このことより、友人との付き合い方の理想と現実は関連があることが分かる。

また、理想と現実の差がどの程度気になるかについては、群れ (気になる) 尺度の得点が高いとふれあい回避 (気になる) 尺度の得点も高く ( $r = .573$ ,  $p < .01$ )、理想と現実の差が気になる人はどちらか一方の因子だけで気になるわけではなく、どちらの因子においても気になる傾向がある。

### (3) 仮説の検証

研究 2 では、① 自己意識特性が高い人は現実と理想の差異を意識しやすいのではないかと、また、② 現実と理想の差異が生じる場面に出くわした時に、他者への基本的信頼感が高い人はその差異をネガティブなものとして意識しないのではないかと、の 2 つの仮説を立てた。その 2 つの仮説の検証を行っていく。

まず、仮説検証を行う前に自己意識特性と基本的信頼感の下位尺度が実際の友人との付き合い方や理想としている友人との付き合い方をどの程度予測しうるかを調べるために、自己意識特性の 2 つの下位因子と基本的信頼感の 2 つの下位尺度を説明変数、友人関係尺度における下位尺度の 2 つをそれぞれ目的変数とし、実際の友人との付き合い方、理想とする友人との付き合い方について重回帰分析を行った。結果を以下のパス図に表す (Fig 1~4)。

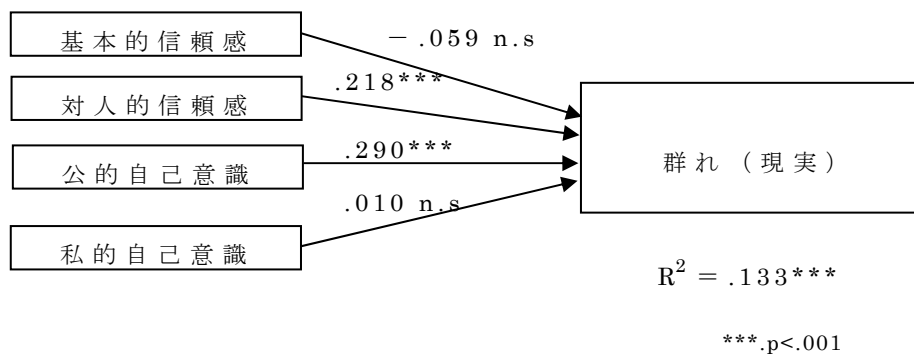


Fig 1 基本的信頼感尺度・自己意識特性尺度の下位尺度を説明変数，友人関係尺度（現実）の下位尺度である群れ（現実）尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

群れ（現実）尺度の得点には，基本的信頼感尺度の下位尺度である対人的信頼感尺度と，自己意識特性尺度の下位尺度である公的自己意識尺度が影響を与えている。基本的信頼感尺度と私的自己意識尺度の得点は群れ（現実）尺度の得点に影響を与えていないという結果となった。

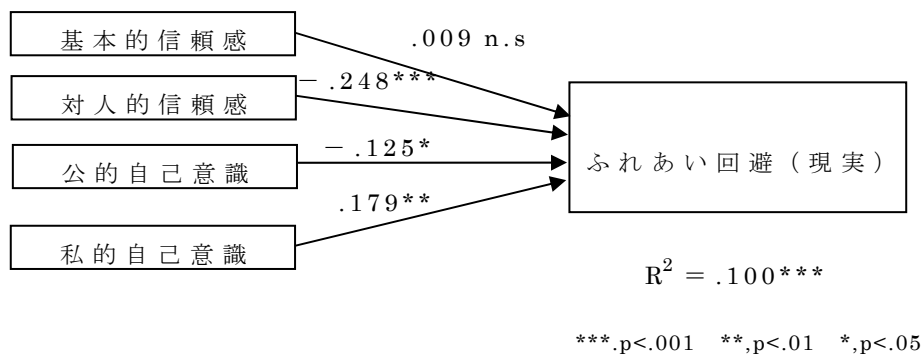


Fig 2 基本的信頼感尺度・自己意識特性尺度の下位尺度を説明変数，友人関係尺度（現実）の下位尺度であるふれあい回避（現実）尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

ふれあい回避（現実）尺度の得点には，対人的信頼感尺度と公的自己意識尺度の得点がそれぞれ負の影響を，私的自己意識尺度の得点は正の影響を与えている。

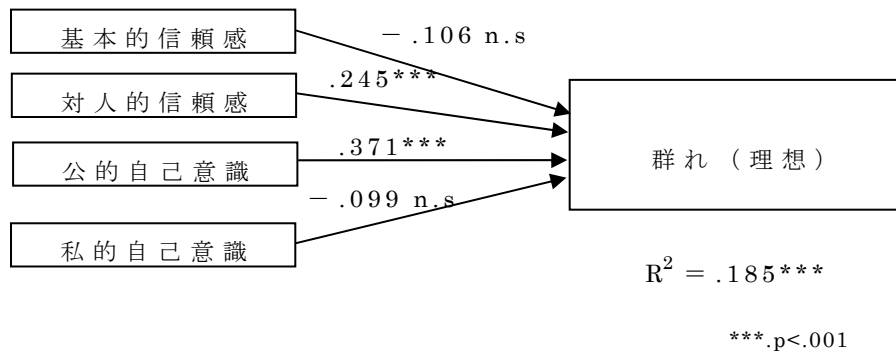


Fig 3 基本的信頼感尺度・自己意識特性尺度の下位尺度を説明変数，友人関係尺度（理想）の下位尺度である群れ（理想）尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

群れ（現実）尺度同様に群れ（理想）尺度の得点に対して対人的信頼感尺度と公的自己意識尺度の得点が正の影響を与えている。また，その影響度は群れ（現実）尺度よりもやや大きい。

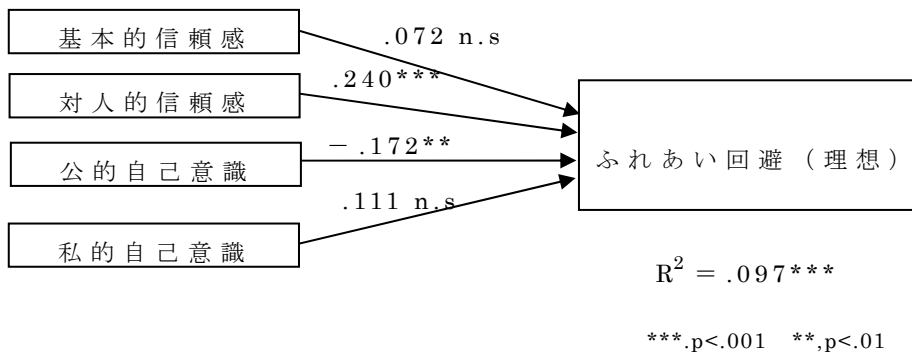


Fig 4 基本的信頼感尺度・自己意識特性尺度の下位尺度を説明変数，友人関係尺度（理想）の下位尺度であるふれあい回避（理想）尺度を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

ふれあい回避（理想）尺度の得点は，対人的信頼感尺度の得点から正の影響を，また公的自己意識尺度の得点から負の影響を受けている。

その結果，対人的信頼感と公的自己意識が実際の友人との付き合い方や理想とする友人との付き合い方に影響を与えていることが明らかとなった。言い換えると，「自分や他者一般への信頼感」よりも「現実の対人関係に対する信頼感」が実際の友人との付き合い方や理想とする付き合い方を規定していることが示唆される。また，私的自己意識よりも公的自己意識が友人関係を規定しうる要因となっていると示唆される。しかし，決定係数が全体的に低いので，友人との付き合い方においてこれら以外の要因が多く影響を与えているといえる。

次に，仮説の検証にうつる。自己意識特性尺度と基本的信頼感尺度を説明変数とし，友人関係尺度における理想と現実の付き合い方に差があった時にどの程度気にするかという質問における下位尺度（友人関係尺度の質問項目と同様）を目的変数として重回帰分析を行った。その結果を，パス図として示す（Fig 5, 6）。

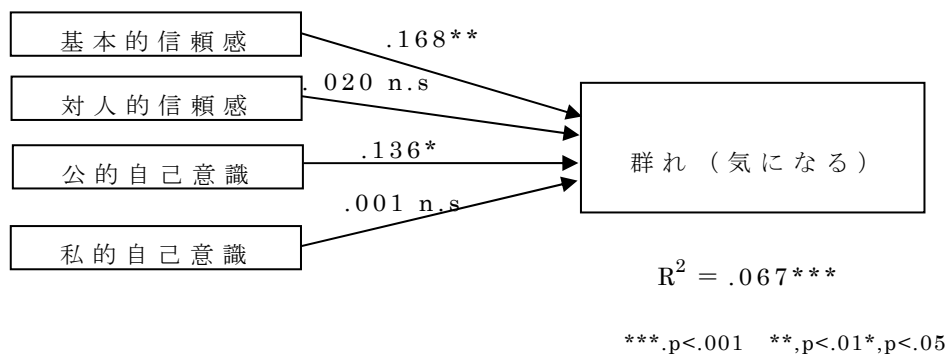


Fig 5 基本的信頼感尺度・自己意識特性尺度を説明変数に、友人関係尺度の友人との理想と現実の付き合い方に差がある時にどれくらい気になるのに関する下位尺度（群れ（気になる）尺度）を目的変数とした重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

群れ（気になる）尺度は基本的信頼感尺度と公的自己意識の影響を受けているが、決定係数は高いとはいえない。

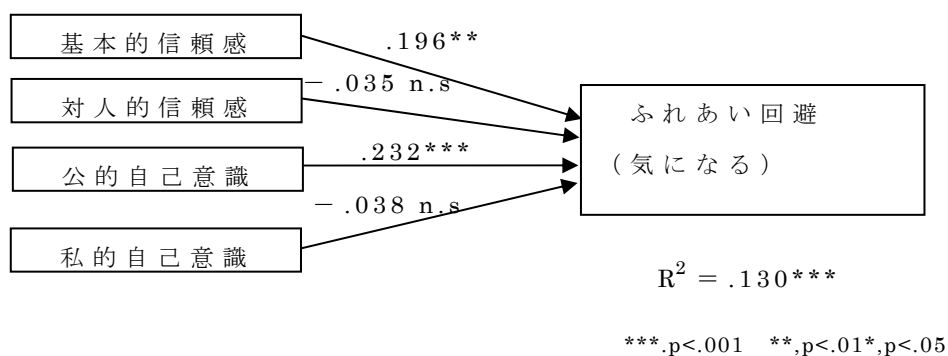


Fig 5 基本的信頼感尺度・自己意識特性尺度を説明変数に、友人関係尺度の友人との理想と現実の付き合い方に差がある時にどれくらい気になるのに関する下位尺度（ふれあい回避（気になる）尺度）を目的変数とした重回帰分析結果（標準偏回帰係数）を示す

群れ（気になる）尺度同様、ふれあい回避（気になる）尺度の得点も基本的信頼感尺度と公的自己意識尺度の得点の影響を受けている。決定係数は、群れ（気になる）尺度よりは高くなっている。

その結果、実際の付き合い方と理想としている付き合い方の間に差があった時に、どの程度その差異を気にするかどうかは、群れ（気になる）尺度、ふれあい回避（気になる）尺度のどちらにおいても基本的信頼感尺度の下位尺度では基本的信頼感尺度が、また自己意識特性尺度の下位尺度では公的自己意識尺度が影響を与えていることが明らかとなった。そのため、仮説の一部は支持する結果となった。しかし、どちらの下位尺度においてもその決定係数の値が非常に低いので、これら以外の要因が大きく関連していることが示唆される。

#### 第 4 節 考察

(1) 基本的信頼感尺度，自己意識特性尺度と友人との実際の付き合い方

決定係数は低い（群れ（現実）： $R^2=.133$ ， $p<.001$  ふれあい回避（理想）： $R^2=.100$ ， $p<.001$ ），対人的信頼感と公的自己意識が実際の友人との付き合い方に影響を与えていることが示唆される。群れ（現実）については、対人的信頼感尺度の得点が高い者は、現在の対人関係に対して信頼しているために、仲間と仲良く楽しく過ごしているという意識が強いのだと推測される。また、公的自己意識尺度の得点が高い者は所属する集団に同調する傾向があるため、それを反映した結果といえる。ふれあい回避（現実）については、自分の所属する集団に対する信頼感が高い対人的信頼感を持つ人は、より友人と深く関わっているという認識を持ちやすいといえる。

(2) 基本的信頼感尺度，自己意識特性尺度と友人との理想とする付き合い方

友人との理想とする付き合い方においても、友人との実際の付き合い方と同様に、対人的信頼感と公的自己意識の影響を受けていた。この結果は、友人との実際の付き合い方と同じような要因が働いているのだと言える。そして、特に公的自己意識尺度の得点が高い者は同調傾向が強いために、現在よりもさらに友人と一緒にいることや友人と楽しく過ごすこと、他者とより深く関わることを望むのだと推測される。



(3) 基本的信頼感尺度，自己意識特性尺度と友人との付き合い方における理想と現実の差異への気にしやすさ

決定係数は低いものの（群れ（気にしやすさ）： $R^2=.067$ ， $p<.001$ ）ふれあい回避（気にしやすさ）： $R^2=.130$ ， $p<.001$ ），友人との付き合い方における理想と現実の差異への気にしやすさは，基本的信頼感と公的自己意識が関連していた。特に，友人との付き合い方の理想と現実を規定している要因では対人的信頼感が関連していたが，友人との付き合い方における理想と現実の差異をどの程度気にするかは，基本的信頼感と関連があることは興味深い結果といえよう。

### 第Ⅲ部 全体の考察

## 第 7 章 本研究の結論

本研究では、友人関係の理想と現実の差異が生じる程度を Internal Working Model (以下 IWM) との関連から、また差異の個人差については自己意識特性と信頼感との関連から検討を行った。本章では、以下の 4 点から理論的な位置づけを行っていく。

本研究の第 1 の結論は、IWM は実際の友人関係だけでなく、理想とする友人関係にも影響を及ぼしているということである。特に、他者は好意的であり、自己は援助される価値のある人間であるという認識をもつ IWM を持つ人や、他者と親しくなることを避け、他者は全面的には信用できないという IWM を持つ人は、特にその傾向が友人関係の理想に対しても影響を与えている可能性が高いことが示唆された。

第 2 の結論は、IWM は友人との付き合い方における現実と理想の差異の大小に関してそれ程大きな影響を及ぼしていない可能性があることである。

第 3 の結論は、実際の友人との付き合い方と理想とする友人との付き合い方は、仮説において、基本的信頼感、対人的信頼感、自己意識特性の全てが関連していると予想していたが、友人関係の理想と現実には対人的信頼感と公的自己意識が影響を与えていた。これは、現在の人間関係、例えば現在所属している集団や親しくしている他者への信頼感が、実際の友人との付き合い方や友人とどのように付き合いたいと思うかについて影響を与えていることを示唆している。言い換えると、友人との付き合い方やどのように付き合いたいかは、自己や他者に対する一般的な信頼感よりも、むしろ現在自分が所属している集団などへの信頼感によって規定されているといえる。また、公的自己意識特性は他者からの評価を特に気にしやすい傾向をもつ性格特性である。公的自己意識が高い人は、自分が所属する集団と上手くやっていくことを意識しやすいため、公的自己意識の高さが現実の友人との付き合い方やどのように友人と付き合いたいかに関連していたのではないかと考えられる。

第 4 の結論は、基本的信頼感と公的自己意識友人との付き合い方の理想と現実の間に差異の気にしやすさにある程度の影響

力を持っていることである。これは、友人との付き合い方の理想と現実に対人的信頼感が影響を与えているのに対し、理想と現実の差異の気にしやすさは基本的信頼感が関連していたという興味深い結果といえる。友人との付き合い方の理想と現実の差異をどの程度気にするかは、自己や他者に対する一般的な信頼感によるところがあり、現在の対人関係一般への信頼感の影響は受けていないことを示唆している。友人との理想と現実の付き合い方の差異が生じたとしても、幼少期に形成された他者一般や自己への安定した基本的信頼感が形成されている人は、それほど理想と現実の差異を気にせず友人関係を築けることを表している。やはり、基本的信頼感の形成はその後の対人場面での問題へも影響を及ぼしていることが推測される。

本研究では、IWMや信頼感、自己意識特性から友人関係における理想と現実やその差異について検討したが、改めてそれぞれの特性が対人関係の中の一つとして位置づけられる友人関係との関連が見られることを明らかにすることが出来た。今後、IWMや信頼感、自己意識特性が現在の対人関係スタイルだけでなく、理想とする対人関係スタイルに関する研究にも応用されることが期待される。

## 第 8 章 今後の課題

本研究での問題点と課題は以下の 2 点である。

第 1 に，自己意識特性の平均点が非常に高くなってしまったという点である。そのため，弁別力が低くなったところがある。青年期では自己意識が最も高まる時期といわれており（Rosenberg, 1979），その点を考慮した分析を行うべきであった。

第 2 に，友人との付き合い方における理想と現実の差異の測定が満足に出来ていない点である。本研究では，確かに Internal Working Model（以下 IWM）や信頼感，自己意識特性が友人関係における理想と現実と関連していることは明らかに出来たが，理想と現実の差異についてはまだ不十分なところが多い。そのため，今後は友人関係における理想と現実の差異を正確に測ることができる手続きを考える必要がある。

#### 第 IV 部 参考文献·引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blenar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment. A psychological study of strange situation*. Erlbaum, Hillsdale, NJ

天貝由美子(1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響  
教育心理学研究, 43, 364-371

浅井千穂(2006). セルフエスティームの高さに及ぼす基本的信頼感  
藍野学院紀要, 20, 65-77

天谷祐子(2005). 自己意識と自我体験—「私」への「なぜ」という問い—の関連  
パーソナリティ研究, 13(2), 197-207

有光興記(2001). 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係, 性格心理学研究, 9(2), 71-86

Bowlby, (1973). *Attachment and loss, vol. 2: Separation*. The Hogarth Press. Bowlby, J. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)).  
母子関係の理論Ⅱ 分離不安. 1977. 岩崎学術出版社)

Bowlby, (1980). *Attachment and loss, vol. 3: Loss, Sadness and depression*. The Hogarth Press. 1981(黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子・横浜恵三子(訳)母子関係の理論Ⅲ 愛情喪失. 1981 岩崎学術出版社)

Bretherton, I. (1990). Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships., *Infant Mental Health Journal*, 11, 237-252.

Bretherton, I., Ridgeway, D., & Cassidy, J. (1990). Assessing internal working models of the attachment relationship. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, and E. M. Comings (Eds) : *Attachment in the preschool years*. 273-308 University of Chicago Press, Chicago

Buss,A.H.(1980). *Self consciousness and social anxiety*.  
San Francisco:Freeman.

Carver,C.S..&Scheier,M.F.(1983). *A control-theory model of normal behavior and implications for problems in self-managiment*. In P.C.Kendall(Ed)Advances in cognitive-behavioral research and therapy.2.New York:Academic

Cheek,J.M.,&Briggs,S.R.(1982) Self-consciousness and aspects of identity. *Journal of Research in Personality*, 16 ,401-408

崔京姫・新井邦二郎(1998). ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感及び精神的健康との関係 教育心理学研究, 46, 432-441

Craik,K.(1943).the nature of explanation.Cambridge.  
*University Press, Cambridge*

Damon.W. (1983) . *Social and personality development*.  
Norton.

Duval,S.,&Wickland,R.A.(1972). *A theory of objective self-awareness*, Academic Press

榎本淳子(1999).青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究,47,180-190

榎本淳子(2000).青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. 教育心理学研究,48,444-453

Erikson.E.H.(1959). *Identity and the life cycle*. Universities Press. (小此木啓吾訳編「自我同一性」1973 誠信書房)

Fenigstein,A., Scheier,M.F.,&Buss,A.H.(1975). “Public and



private self-consciousness:Assessment and theory”, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527

Fenigstein,A.(1979). Self-consciousness, self-attention,and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37 ,75-86

藤井恭子(2001). 青年期野友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155

古市裕一・玉木弘之(1994). 学校生活の楽しさの規定要因 *Bulletin of School of Education. Okayama University*, 96, 105-113

Grace,G.D.,&Schill,T.(1986). social support and coping style differences in subjects high and in interpersonal trust, *Psychological Reports*, 59, 584-586

Gurtman,M.B.(1992). Trust,distrust,and interpersonal problems:a circumplex analysis. *Journal of Personal and Social Psychology*, 62, 989-1002

Hazan,C. and Shaver,P(1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*,52,511-524

伊藤美奈子(1992). 自己受容を規定する理想—現実の差異と自己意識についての研究 日本教育心理学研究, 40, 164-169

神保信一・須々木真紀子・中島秀男[他](1996). 不登校の児童・生徒の保健室登校に関する調査研究(1) 心理学紀要, 6, 35-44

金子一史(1999). 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について 性格心理学研究, 8(1), 12-22

金本めぐみ・横沢民男・金本益男(2000). 青年期における身体

と自己の相互認知に関する研究 上智大学体育, 33, 35-42

Kang, S., & Shaver, P. R. (2004). Individual Differences in Emotional Complexity: Their Psychological Implications. *Journal of Personality*, 72, 687-726

柏木恵子(1983). 子どもの「自己」の発達 東京大学出版

粕谷貴志(2001). 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 日本教育心理学会発表論文集(43), 225

加藤滋・谷口淳一・加藤潤三・青野明子・小牧一裕・森上幸夫・山野晃(2008). 大学新入生の対人関係能力に関する探索的研究 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 576-577

加藤隆勝・高木秀明(1997). 青年心理学概論 誠信書房 110-121  
小嶋佳子(2008). 感情経験と自己意識・他者意識の関係—感情の種類による違い— 愛知教育大学研究報告, 57(教育科学編), 83-90

松井豊(1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊地章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店.

松永真由美・岩元澄子(2008). 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究, 7, 77-86

Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society*. University of Chicago Press.

三浦潤子(2003). 養育行動と学校環境適応感の関連についての検討—内的作業モデルの伝達を通して— 臨床教育心理学研究, 29(1), 9-10

宮下一博(1998). 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要, 46, 27-34

文部科学省(2006). 平成 18 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.

諸井克英(1987). 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, 26(2), 151-161

中井大介・庄司一子(2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, 54, 453-463

中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(1991). 心理学辞典 有斐閣.

中村陽吉(1990). 自己過程の社会心理学 東大出版会.

落合良行・佐藤有耕 (1996) .青年期における友だちとのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65

岡田努(1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 43, 354-363

岡田努(1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 442-449

岡田努(2005). 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇, 25, 15-32

大平英樹(1989). 怒りの動機と反応に対する自己意識の影響 社会心理学研究, 4(1), 30-37

大崎園生(2003). 青年期における友人関係とアイデンティティについて— 共感性と自己の感情体験を中心に— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀, 50, 332-333

押見輝男・安藤清志・松井豊(1992) 自分を見つめる自分. サ

イエンス社

小塩真司(1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290

Rotter,J.(1967). A new scale for the measurement of interpersonal trust , *Journal of Personality*. 35(4), 651-665.

酒井厚(2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9(2), 59-70

Scheier,M.F.(1980). Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521

柴橋祐子(2004). 「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23

嶋野重行・鈴木志穂子・菅原正和(2004). 青年期における IWM (Internal Working Model)と対人不安 岩手大学教育学部研究年報, 63, 別刷

白井利明(2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴—変容確認法の開発に関する研究(Ⅱ)— 大阪教育大学紀要, 第IV部門, 54(2), 151-171

菅原健介(1984). 自意識尺度日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188

鈴木有美(2004). 現代青年の友人関係における主観的ウェルビーイング—共感性, 怒りの特性及び表出傾向との関連— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 151, 207-213

高井範子(2008). 青年期における人間関係の悩みに関する研究

太成学院大学紀要,10,85-95

高野慶輔・丹野義彦(2009). 抑うつと私的自己意識の2側面に関する縦断的研究 パーソナリティ研究, 17(3), 261-269

詫摩 武俊・戸田弘二(1988). 愛着理論からみた青年の対人態度--成人版愛着スタイル尺度作成の試み 人文学報,196, 1-16

田名場美雪・佐々木大輔・佐藤清子(2001). 青年期における基本的信頼感と対人関係(2) 弘前大学保健管理概要, 22, 13-20

谷冬彦(1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9(1), 35-44

丹野義彦・丹野ひろみ(1987). 社会心理学的自己認知理論からみた精神分裂病の自己の病理—公的自己意識が私的自己意識を侵害する事態について— 群馬医療短期大学紀要, 8,47-58

戸田弘二(1991). Internal Working Models 研究の展望 日本教育心理学会, 47, 432-439

富田俊昭・水子学・金光義弘(1999). 認知概念モデルによる対人不安の検討—自己意識特性, 自己評価及び対人不安の関連について— 9(1), 49-54

辻平治郎(1993). 自己意識と他者意識 北王子書房.

辻平治郎(2004). 自己意識と自己内省: その心配との関係 甲南女子大学研究紀要 人間科学編, 40, 9-18

清水健司(2009). 青年期における対人恐怖心性と自己関係づけの関連 人文科学論集人間情報学科編, 43, 65-75

渡辺克徳(2004). 公的自己意識と抑うつの関係について—抑う

つに他者の存在は重要か— 臨床教育心理学研究, 30(1), 33-37

Wicklund, R.A., & Golwitzer, P.M. (1987). The fallacy of the private-public self-focus distinction. *Journal of Personality*, 55, 491-523

山形恭子(2005). 自己意識と公私社会認識に関わる行動との関連 金沢法学, 47(2), 1-21

山岸明子(1994). 女子青年の内的作業モデルと過去から現在の対人的経験との関連 順天堂医療短期大学紀要, 5, 52-63

山岸明子(1997). 青年期後期から成人期初期の内的作業モデル: 縦断的研究 発達心理学研究, 8(3), 206-217

山岸明子(2000)内的作業モデル尺度の構造と4時点での変動—女子看護短大生を対象として— 順天堂医療短期大学紀要, 11, 41-50

山岸明子(2004). 女子青年が持つ現在の対人的枠組みと生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連 発達心理学研究, 15(2), 195-206

山本多喜司(編訳)(1990). 社会性と人格の発達心理学 北大路書房.

吉岡和子(2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30

財団法人日本青少年研究所(2004). 高校生の生活と意識に関する調査

## 謝辞

本研究を完成させるにあたって、たくさんの方々のお力添えがありました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

菅原正和先生には、1年間という短い間でしたが、心理学についての基本的な知識や修士論文を進めるにあたっての直接のご指導をいただきました。さらに、修士論文についてだけでなく、私生活での相談を聞いていただいたり、たくさんのおアドバイスをくださったりと、数々の面で助けてくださいました。菅原正和先生から多くのことを学ばせていただきました。

また、阿久津洋巳先生には統計についての基本をみっちりのご指導いただきました。わずか1年で統計について、ここまで力をつけることが出来たのは、本当に阿久津洋巳先生の指導があったからこそだと思います。さらに、統計の手法だけでなく、論文を書くにあたってのアドバイスをしていただきました。

神常雄先生には、講義を通して心理学に対する知識を学ばせていただきました。さらに、顔を合わせると決まって温かい言葉をかけてくださいました。その言葉が、とても励みになりました。

さらに、岩木信喜先生にはみっちり論文を書く際の理論構成をご指導していただきました。特に、私が中間発表後に路頭に迷いそうになった際に、方向性をしっかりと決めることが出来たのは、岩木信喜先生の指導があったからこそだと思います。理論を組み立てることの大切さが非常に良く分かりました。

あらためて4人の先生に深く感謝申し上げます。

最後に、アンケートにご協力いただいた岩手大学生の方々、統計が全く分からなかった私に丁寧に分かりやすく教えてくれた佐々木正輝くん、また、現職の先生ということで社会に出てからたくさん役に立つことを教えてくださった佐々木正輝さんと支え合い励まし合うことが出来たためここまで頑張れたのだと思います。そして、遅くまでもともに修士論文に取り組んだ学校教育専攻の大学院生の皆さん。今まで修士論文を仕上げるにあたり、関わったすべての皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

平成 21 年 1 月 21 日  
和 賀 千 裕



## Appendix

## 友人関係意識調査

この調査は修士論文で使用するものであり、他のところで使用することは決してありません。少し長いものではありますが、ぜひ回答にご協力お願いします。

□あなたについての情報をお聞きます。

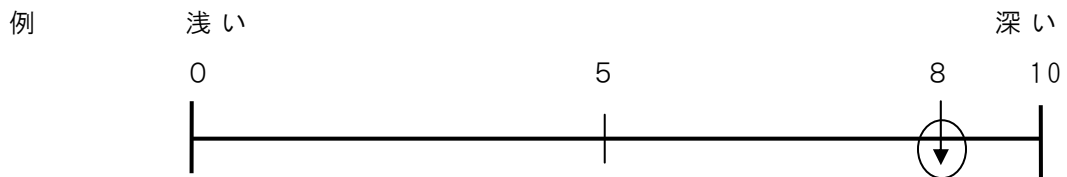
性別 1. 男性 2. 女性 現在の年齢 [ ] 歳

学部 [ ] 学年 [ ] 年

1. あなたの友人関係についてのイメージをお尋ねします。以下の問いに回答してください。

①あなたは友人と どのように付き合っている と思いますか。例を参考に、あてはまると思うところに

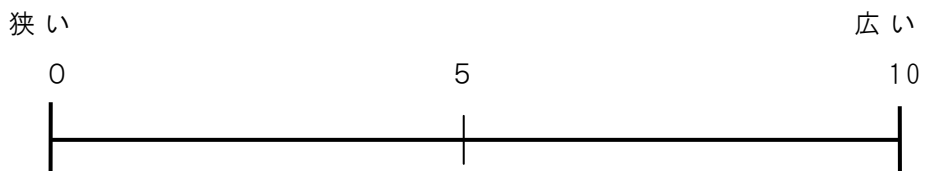
0～10の間で数直線上で丸をつけ、その数字を書いてください。



(1) 友人との付き合いの深さイメージ

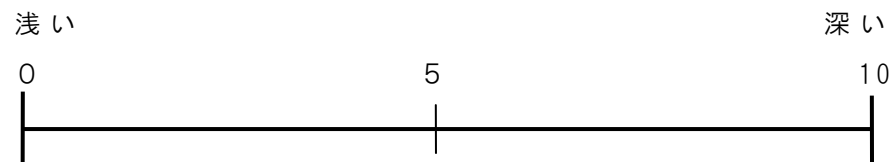


(2) 友人との付き合い方の広さイメージ

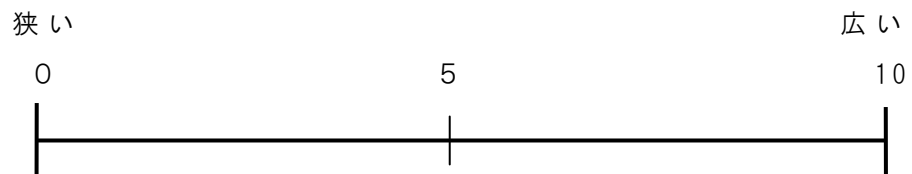


②次にあなたが望む友人との付き合い方のイメージにあてはまると思うところに、0～10の間で数直線上で丸をつけ、その数字を書いてください。

(1) 友人との付き合いの深さイメージ



(2) 友人との付き合い方の広さイメージ



2. あなたが他者とあなた自身との関係をどのようなものとして捉えているかについてお聞きします。以下の各問について、それがどの程度「あてはまるか」あるいは「あてはまらないか」を1～5の段階の一つを選び○をつけてください。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あてはまらない	あてはまらない
(1) 私は知り合いが出来やすい方だ。	1	2	3	4	5
(2) 本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと 思うことがある。	1	2	3	4	5
(3) 人に頼るのは好きではない。	1	2	3	4	5
(4) 私はすぐに人と親しくなる方だ。	1	2	3	4	5
(5) 時々友人が、本当は私のことを好いてくれているのではないかと、 私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある。	1	2	3	4	5
(6) 私は人に頼らなくても、自分ひとりで十分にうまくやっていけると思う。	1	2	3	4	5
(7) 私は人に好かれやすい性質だと思う。	1	2	3	4	5
(8) 自分を信用できないことがよくある。	1	2	3	4	5
(9) あまりにも人に親しくされたり、こちらが望む以上に 親しくなることを求められると、イライラしてしまう。	1	2	3	4	5
(10) たいいていの人には私のことを好いてくれると思う。	1	2	3	4	5
(11) あまり自分に自信が持てない方だ。	1	2	3	4	5
(12) あまり人と親しくなるのは好きでない。	1	2	3	4	5
(13) 気軽に頼ったり頼られたりすることがある。	1	2	3	4	5
(14) 私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人から疎まれてしまう。	1	2	3	4	5
(15) 人は全面的に信用できないと思う。	1	2	3	4	5
(16) はじめてあった人とでも上手くやっていける自信がある。	1	2	3	4	5
(17) ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう。	1	2	3	4	5
(18) どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい 態度をとられると嫌になってしまう。	1	2	3	4	5

回答ありがとうございました。

## 友人関係意識調査

この調査は修士論文で使用するものであり、他のところで使用することは決してありません。また、データは統計的に処理されるため、個人が特定されることはありません。少し長いものではありませんが、ぜひ回答にご協力をお願いします。

□ あなたについての情報をお聞きします。

性別 1. 男性      2. 女性      現在の年齢 [                      ] 歳

1. 次の文章を読み、あなたの今の気持ちや考えに最も近いところ1つに○をつけて下さい。

		あてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あてはまらない <small>あまり</small>	あてはまらない
① 普通、人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う。	5	4	3	2	1	
② 人から見捨てられたのではないかと心配になることがある。	5	4	3	2	1	
③ 自分自身のことが信頼できないと感ずることがある。	5	4	3	2	1	
④ 周囲の人々によって自分が支えられていると感ずる。	5	4	3	2	1	
⑤ 失敗すると、二度と立ち直れないような気がする。	5	4	3	2	1	
⑥ 自分が困ったときには、周りの人々からの援助が期待できる。	5	4	3	2	1	
⑦ 人生に対して、不信感を感じることがある。	5	4	3	2	1	
⑧ 一般的に、人間は信頼できるものであると思う。	5	4	3	2	1	

2. 以下の項目は、あなたにどの程度あてはまるでしょうか。最も近いところ1つに○をつけて下さい。

		あてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あてはまらない <small>あまり</small>	あてはまらない
① 自分が他人にどう思われているのか気になる。	5	4	3	2	1	
② 自分がどんな人間なのか自覚しようとしている。	5	4	3	2	1	
③ 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ。	5	4	3	2	1	
④ 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。	5	4	3	2	1	
⑤ 人前で何かをする時、自分のしぐさや姿が気になる。	5	4	3	2	1	
⑥ しばしば、自分の心を理解しようとする。	5	4	3	2	1	
⑦ 自分についてのうわさに関心がある。	5	4	3	2	1	
⑧ 自分が本当は何をしたいのかを考えながら行動する。	5	4	3	2	1	
⑨ 他人を見るように自分をながめてみることもある。	5	4	3	2	1	
⑩ 他人からの評価を考えながら行動する。	5	4	3	2	1	

3. あなたと、あなたの友人との付き合い方についてお尋ねします。以下の各問について、(1)～(3)の質問について、最も近いと思うところに1つずつ○をつけて下さい。

(1) あなたが友人と実際にしている付き合い方を思い浮かべた時に、どの程度「あてはまるか」あるいは「あてはまらないか」について最も近いところ1つに○をつけて下さい。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	あてはまらない
① みんなで一緒にいることが多い。	5	4	3	2	1
② ウケるようなことをする。	5	4	3	2	1
③ お互いのプライバシーには入らない	5	4	3	2	1
④ 相手に甘えすぎない。	5	4	3	2	1
⑤ 相手の言うことに口をはさまない。	5	4	3	2	1
⑥ 楽しい雰囲気になるように気を使う。	5	4	3	2	1
⑦ 心を打ち明ける。	5	4	3	2	1
⑧ 友達に冗談を言って笑わせる。	5	4	3	2	1
⑨ お互いの領分にふみこまない。	5	4	3	2	1
⑩ 一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする。	5	4	3	2	1

(2) あなたの友人との理想的な付き合い方を思い浮かべた時に、どの程度「やりたいか」あるいは「やりたくないか」について最も近いところ1つに○をつけて下さい。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	あてはまらない
① 一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする。	5	4	3	2	1
② 楽しい雰囲気になるように気を使う。	5	4	3	2	1
③ お互いのプライバシーには入らない	5	4	3	2	1
④ 心を打ち明ける。	5	4	3	2	1
⑤ 相手の言うことに口をはさまない。	5	4	3	2	1
⑥ ウケるようなことをする。	5	4	3	2	1
⑦ 相手に甘えすぎない。	5	4	3	2	1
⑧ 友達に冗談を言って笑わせる。	5	4	3	2	1
⑨ お互いの領分にふみこまない。	5	4	3	2	1
⑩ みんなで一緒にいることが多い。	5	4	3	2	1

(3) あなたが友人と実際にしている付き合い方とあなたの友人との理想的な付き合い方に差があるとした時に、あなたはどの程度「気になるか」あるいは「気にならないか」について最も近いところ1つに○をつけて下さい。

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
① 心を打ち明ける。	4	3	2	1
② みんなで一緒にいることが多い。	4	3	2	1
③ お互いの領分にふみこまない。	4	3	2	1
④ 相手に甘えすぎない。	4	3	2	1
⑤ 相手の言うことに口をはさまない。	4	3	2	1
⑥ ウケるようなことをする。	4	3	2	1
⑦ 楽しい雰囲気になるように気を使う。	4	3	2	1
⑧ 友達に冗談を言って笑わせる。	4	3	2	1
⑨ 一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする。	4	3	2	1
⑩ お互いのプライバシーには入らない	4	3	2	1

ご協力いただきありがとうございました。